琵琶歌研精會編

音譜

正調

琵琶歌粹錦

253
279

特63
622

はしがき

薩摩琵琶歌は、師に依らずして之を獨習すること甚だ難しとなれども、其大體の音譜を練習し、併して專門の吟誦する音調に就て正誤するところあらば、或は自在に獨吟誦し得べきなり。

畢竟歌譜は其歌意に從ひ、自然の譜を旨とし、喜怒哀樂を發音に依て區別せしむることに努めざるべからず。

一本書は豫め初學者に便せんが爲め、活字の譜號を以て音調を區別す、若し譜號なき場合は「地の音」とて平音を以て吟す

39
内交

べきなり。

一活字的譜號、到底正確を期し難し、其妙趣を究めんとならば、適當なる師を選んで教を請はざるべからず。

◉譜號

「」……段落……音聲を切る

◎……大かん……大聲に

△……中かん……結末の句に節を用ゆ

○……吟替り……悲哀の聲

、……くずれ……緩急

編者ちるす

琵琶歌粹錦

目次

◎金剛石……一頁
◎威海衛……二
◎臺灣入……六
◎常陸丸……一一
◎封鎖隊……一四
◎旅順の魁……一六
◎金州南山……二〇

◎征露の歌……二四
◎軍神廣瀬中佐……二六
◎赤十字……三〇
◎歸郷兵士……三一
◎月下の陣……三三
◎七卿落……三四
◎新玉（一名松囃）……三五
◎笠置の御夢……三七
◎正行の參内……三九
◎湊河……四二

◎四條畷の合戰……四六
◎城山……五一
◎石童丸……五三
◎錦の御旗……五八
◎勿來關……六三
◎兒島高德……六四
◎小督……六七
◎千代の春……七一
◎小敦盛……七三
◎同二段……八四

◎春の調……九一
◎吉野の落……九二
◎同　二段……九八
◎老蘇の森……一〇三
◎兵六物語……一〇五
◎那須與市……一一〇
◎同　二段……一一三
◎同　三段……一一五
◎迷悟もとさ……一二五
◎飛鳥川……一三一

◎王昭君……一二四
◎蓬萊山……一二七
◎武蔵野……一二九
◎俊基東下り……一三〇
◎篠原合戰……一三七
◎同　二段……一四〇
◎熊本籠城……一四四
◎川中島……一四六
◎月花……一五一

目次

終

音譜正調 琵琶歌格錦

琵琶歌研精會編

◉金剛石

金剛石も磨かずは、玉の光は添はざらん、人も學びて後にこそ、「誠の德は顯るれ」。時計の針の絶間なく、廻るが如く時の間も日影惜みて勵みなば、如何なる業かならざらん、水は器に從ひて、其樣々になりぬなり、人も交はる友に依り、善に惡に移るなり、己れに優る良き友を、「撰び求めて諸共に」、心の

駒に鞭打ちて、「學びの道に進めかし」、

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

◉威海衛

名も高き渤海灣の咽喉なる威海衛の戰に、吾聯合艦隊司令長官伊東中將の、手足の如く率ひたる、水雷艇の功は、「聞くも中々勇ましや」、敵の艦隊勇々しくも、威海衛の要害に、防材堅く布設して、灣内深く潜みつゝ、戰ふ樣も有らされば、吾海軍は朝の雨に身を浴し、夕の風に櫛けづり、只だ遠近を取り卷きて、空しく時日を過せしが、吾陸軍は日島と劉公島を除く外、處々の砲臺攻取りたりと信號の旗を見て、伊東司令長官は、急に水雷艇に命令を下し、水雷攻擊を命ずれば、藤田少佐今井大尉の兩司令、姿勢を正して申さる樣、其は我等の望むところ、されど亦、僅か防材の切れ目を目差し、暗礁多き海なれば、誓て功は奏せんものゝ、水雷艇は悉く再びこに歸まじ、さらばとばかり立ちあがり、忠義面に表れしを、伊東司令長官もそぞろに感じ、落る涙も國の爲め、思ひ切りてぞ別れける、夜も早や更けて月影は、威海衛の山にかくれ、あやめもわかぬ眞の暗み、敵兵夢を結ぶ頃ろ、我水雷

艇は第六艇を先鋒として、百尺崖のこなたより、波をけたて、進み入る、其の勢のすさまじき、港灣内に突入れば、敵の哨艇之を知り、信號の光きらめくや、灣内俄かに騒立ち、打出す速射の砲丸は雨か霰れと降る中を、吾艇隊は物ともせず、忠義の身をや捨小舟、縱横無盡に馳廻る、第九號艇は素早やくも、巨艦間近く進み寄り、魚形水雷を發すれば、水烟一度にどっと上げ、命中の音天地もさけん斗りにて、艦體中なかば沈めらる、其の明の夜も、此や彼處に水雷の音すさまじく、堅城鐵壁と頼みたる、旗艦定遠を初めとし、來遠威遠も

沈められ、戰鬪力も盡きぬれば、丁提督思ふ樣兵士斗りは助けんと、頃は明治の二十八年二月十二日の朝風に、なびくや力なくなくも、白旗を擧て降伏の、「使節の船ぞ見るにける」、武士は物の哀れを知るとかや、伊東司令長官は、丁提督の乞を入れ、些か心を慰めんと、贈り物をぞ遣さる、丁提督は悄然として、吾事已に終りぬと、心しづかに自害して、武人の道をぞ守ける、嗚呼昨日迄も今日迄も、清國に鏘々たる北洋艦隊の司令官丁汝昌とも仰かれし身の、斯くなり果つるは敵ながら、又も得難き英雄の、末路の程こそ是非なけれ、此に威海

衛を占領し、砲聲全く治まれば、風雲忽ち一變し、威海の淵にうづ巻きし鎮遠號を初めとし、濟遠平遠廣丙號其外砲艦數十艘、檣頭高く雨を呼び雲を起せし黄龍も、大和劍に角をたち、忽ち旗は日の丸の、「輝き渡る海軍旗」、君が御稜は天が下、「仰がぬものこそ無かりけり」、

* * * * * * * * *

◉臺灣入

皇の御稜威は四方に輝きて、清國遂に和義を乞ひ、臺灣島を獻上し、合戰茲に治まれる、「君が御代こそ目出度けれ」、臺灣

島の土賊共、龍車に向ふ螳螂の斧を振ふと聞へしかば、征討の師をぞ遣はさる、近衛兵の精兵を率ひて御渡海遊はせしは陸軍の中將大勳位北白川の宮とて、金枝玉葉の御身なり、三貂角の御上陸幕營ありし其の跡に、木を削りてぞ印るさるゝ、炎熱燒くが如き日に、三貂大嶺の險をは馬にも召されず越へ給ひ、大雨しきりに降る時は、濡れにぞ濡れて進まるゝ、士卒も之れに感激し、病兵さへも立上り、命を惜まず進軍す、諸所の砦に籠りたる賊兵等打出す彈丸は、雨か霰れか白ゆきの降り注ぐか如くにて、砲烟暗く天を覆ひ、百雷等しく落つる

に似たり、宮は矢石を犯しつゝ、突喊せよと下知あれば川村少將小島大佐を始とし勇み立ちたる近衞兵、我先きに奮進し、敵の本營に突て入る、賊兵之れに氣を呑まれ、右往左往に逃げ散りて降參する者數知れず、大砲小銃の戰利品山をもつかんばかりなり、宮は此時悠々と基隆城に入らせ給ふ、斯くて六月十日には、臺北城を落入れ、七月には新竹城を占領し、明る八月には彰化臺灣の兩府を定め、十月の始つ方臺南さして進まるゝ、天暑くして瘴癘多く、地嶮しくして糧道絶ゆ、千辛萬苦の其の中に、宮は士卒と食を分ち、晝は汗馬に鞭をあて夜は亂野に露營して、只國の爲め君の爲め、平定の策を廻らし給ふ、嗚呼御痛しや悲しやな、竹の園生の御身にて、餘りに艱苦を積ませられ、遂に御病氣に罹らせ給ひ、日々に重らせ給ふ樣、御供の人々打驚き、都に歸らせ給ふ樣、切に御諫め申せども、宮はいつかな聞し召さず、我官軍の將として賊徒平定見ぬ中に、例へ我身は臺灣の土となればとて、士卒のみ打ち捨て如何で都へ歸るべき、籠に召されて進まるゝ、御臨終の其の際に、賊徒平定と聞し召し、宮は完爾と打笑みて、唯萬歳とばかりにて敢へなく天に登り給ふ、傳へ聞く、日

本武の古事を今目の前に見參らせて、國中の民も勇士も慟哭せぬはなかりける、去りながら昨日今日とは思はねども、老若不定に貴賤なし、唯人は名こそ惜しけれ、皆人は名を後の世に殘せかし

臺北融々仁政成　皇軍至所涌歡聲
旭光將被臺南地　殲破土魁安萬世

と宮の吟し給し如くにて、盛功偉烈後の世に「輝き渡るぞ有難き」、北白川の水は逝きて歸らねども、月影永く澄み渡り、光は「世々に流るらん」、

◉常陸丸

征露の軍やうくに、進みくて南山の嶮阻も既に打破り、音に聞へし要害の、旅順港もとざされて、鷲の棲むてふ滿洲も、君が御稜の旗風に、「今は靡かぬ草もなし」心筑紫の島離れ、玄海灘の只中に、吹く汐風に日の丸の旗を飜へす常陸丸、佐渡も續ひて進み行く、船路のはては白浪の、寄る邊や如何に遠からむ、何を荒ふる荒潮の、逆捲く中の黑烟、只ひと筋に走り來て、我を取り捲く敵の艦、こは何事と言ふ間も無く、亂射亂擊雨霰れ、進み逃れん暇も無し、千里を走る猛獸も、水

に入りてはいかにせむ、萬里を翔る大鵬も、涙には翼折れぬべし、心ばかりは早やれとも運送船の悲しさは、進退爰にきはまりて、詮方無くも敵艦に任せはてしぞ是非もなし、佐渡は如何となかむれば、霧にへだたりわかねども、同じ樣なる運の末へ、輸送指揮官須知中佐、是迄なりとや思ひけむ、大久保少尉の捧げたる、聯隊旗をは手に受て、都の方を伏をがみ、火をはなちてぞ燒きたれば、各々將士も其れ〳〵に、貴重の品々燒捨てぬ、此の有樣を打見つゝ、中佐は軍刀拔き放ち、無念の涙はら〳〵と、落るを袖に打ちはらひ、萬歲唱へ

悠々と、腹かつ切つてぞうせにける、連なる將校を初めとなし、下士卒に至る迄で、同じ枕に伏すもあり、海に投じて死すも有り、敵彈益々加はれば、甲板上はたちまちに、屍の山を築きつゝ、流るゝ血汐に玄海の浪は朱にぞ染みにける、哀れはかなや常陸丸、君萬歲の聲細く、日は六月十五日、夕日は波に落ちざれど、霧たちかすむ海原はあやめもわかぬばかりなり、實に誠忠のつはものが、十年の間朝夕に、磨ききたへし日本刀、精氣こもれる切あじを、試さむ敵を前に見て、遺恨の刃ひと太刀も、酬ひん事もなくばかり、駒のひづめに滿

洲を、踏みにじらんも夢なれや、『ウラル、バイガル』打越へむ
あらまし事も幻か、「思へば無念の極なり」、あゝ一聯隊の我勇
士、水漬く屍と消へしかど、國につくせしますらをの、清き
其名は萬代の響きの灘に立つ波の、絶ゆる時なく仰かれて、「末
迄遠く流るらむ」、

◉封鎖隊

征露の戰さ其中に、旅順港口の戰に危き虎口の險を冒し、重き
任務を纏ひつゝ、「命を的に進みたる」、塞隊の功績は、「聞くも
中々勇ましけれ」、されば東郷長官は、旅順港口を閉塞し、遁

れ出づる敵艦の、航路を鎖させよと命せられ、其任務に當る
爲め、撰びあげたる勇士こそ、是れぞ譽の決死隊、再び生き
て還らじと、頃は如月二十四日を初めとし、尚も屈せず三度
迄、我が閉塞隊は探海電燈を閃かせ、射口を揃へて散々に、打
出す大砲の彈丸は、雨か霰か白雪の、降り注ぐが如くにして
隊をねらふて敵艦は、左に右に寄せくるを、などかをそれぬ
決死隊、胸を楯に身を的に、鐵よりかたき武心、進め進めと
聲高く、勇みに勇むはやり雄の、閉塞員の勇ましき、重き任
務を果したる、降り來る彈丸も顧ず、列を亂さず悠々と、高

き譽を萬世の、歴史にもつたへし「ためしは非らざらむ」、されば千年の後までも、語り傳へて諸共に、「ほまれのほどを歌へかし」

＊　＊　＊　＊　＊　＊

◉旅順の魁

抑文明を平和に求め、東洋の治安を永遠に維持し、帝國の安全を保障するは、「夙に我國交の要義なり」、然るに露國は清國との盟約、及び列國に對する宣言に背き、みだりに滿洲を占據して、韓國の保全を危ふせんとす、「去れは 今上皇帝陛下は、露國の暴虐無道を懲し給はんと、「義憤の王師を進め給ひけり、維時明治三十有七年、如月六日の朝まだき、我聯合艦隊は、運送船を伴ひつゝ、「佐世保の軍港乘出し、朝鮮海へそ向ひしが、仁川港の沖合にて、或る一隊を引離し、陸兵護送の任務を命じ、殘る主戰の艦隊は、三笠、敷島、富士、八島、其他の艦艦十六艘、驅逐艦をも引率し、威風堂々、列整然、舳艫相銜み進み行く「指してゆくへは渤海の、灣港扼す旅順口、露西亞の主力の集まれる、軍港なりと知られたり、斯くて八日の夕刻旗艦より、我逐驅艦隊に對ひ、是より敵艦を擊沈せ

よ、一同の成功を祈ると信號ありければ、『將卒共に雀躍し、必らず成功すべきを誓ひ、意氣衝天の勢ひにて、浪を蹴立て猛進す、矢を射る如き朝潮に、立つは煙か白雪か、霧にまがふ曉の、空にとゞろく雷の、音凄ましや朧夜を、照らす電ひらめきて、影うすれゆく薄雲も、『東雲近く晴れ渡り、寄する漣音もなし、斯く三隊に列を備へ、眞夜中頃に旅順間近く進みしも、警戒怠る敵艦は、さなから眠る鷲の如く、我が隼のはやわざに、撃たれんとても知らざりしが、我れが放ちし水雷に、たちまちパツト水けふり、敵艦周章ふためきて、夢諸

共に艦底も、打破られて傾きたり、されど數多の敵艦より打出す砲彈猛烈にて、面を向けむ樣なきも、大膽不敵の我軍は、豫て鍛へし腕まへを、顯はすときは今此處ぞと、『砲煙彈雨を物ともせず、敵艦めかけて發射する、水雷美事に命中し、またたくひまに二三艘、痛手を負ひて遁れしが、「遂に沈沒したりけり、此時殘餘の敵艦より、探海燈をふり照らし、我進路を妨げければ、こゝに襲撃の功を收め、旅順口の外洋に、我艦隊は集合し、凱歌あげて悠然と、南を指して引揚げしは、最と勇ましき有樣にて、是れ開戰の捷利なり、「是れ開戰の勝利

なり」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

◉金州南山

扨ても清國遼東半島の、咽喉扼す南山は、難攻不落の要害として所謂一ツ夫これに當れば、萬夫も進み能はざる、「實に究竟の關門なり」然るに露軍は此の山巓に據り、「堅固の防備を施して、我が皇軍を擊退せんと、勇ましけにも待かけたり、已に我第二軍の一枝隊は、普蘭店一隊の地を占領し、敵の連絡を斷ちければ、徐に軍議を凝しつゝ、敵壘攻擊の準備をば爲

したりける、『時こそ來れ皐月闇二十五日の眞夜中に、全軍陣地を出汐や、逆卷き寄する勢ひに、さしも嶮阻の南山も、押し崩されんばかりなり、折しも一天搔き曇り、忽ち閃めく電光に、どゞろき渡る雷諸共、暴風起り猛雨來り、呎尺を辨ぜぬ其機に乘じ、先づ金州城を攻め落せり、此時夜はほの〳〵と明け初めて、狹霧を洩る〻朝日影、御國の旗章視る如くいとも目出度き光景に、味方はいよ〳〵勇み立、山の麓に押寄せたり、敵は地の利に據れる保壘に、大小砲を備へ着け、其前面に數多の地雷を埋め、又鐵條網を張りめぐらし、警備ヲ

サ〳〵嚴重にて、空飛ぶ鳥にあらざれば、たやすく近づくべくも見へざりけり、されば我が勇敢なる軍隊は、少しもためらふ色もなく、第一師團を中央とし、第三師團を左翼に備へ、第四師團を右翼に張り、『敵の陣地を取り圍む、やがて開くや兩軍の、砲戰互ひに優劣なく、いつか勝負もあらしをの、血氣に誇る關東武者、意氣衝天の勇を皷し、敵陣目指し突擊せしも、筒先下りに打おろす、敵の射擊に堪りゐず、あはれバタ〳〵、うち倒さる、殘念なりと新手を替へ、幾度も强襲を繰返へせども、鐵條網にさまたげられ、頗る苦戰に陷りたり、我

が左翼の第三師團も、敵の包圍になやまされ、携へ行きし彈藥も、殘り少なになりければ、『むかしの名殘いまこゝに、見せばや三河の武者振をと、砲火を冒し突進す、折もこそあれ金州灣の沖合に、進み寄りたる我艦隊は、第四師團に力を協せ、怒れるごとき砲彈を、敵の左翼に打注げば、さすが頑固の敵軍も、遂ひにひるみて沈默す、いざや猶豫もあら磯を、渡り群がる浪速の勇士、嶢巖絶壁物ともせず、最と易げにも攀登り、首尾よく敵陣奪ひ取り、國旗をこそはあげたりける、おくれはせじと第一第三兩師團も、驀然敵壘に肉薄し、劍尖ま

じはる激戰に、敵を縱横に薙き散らし、「全く南山を攻め取りて、ドッとあげたる三軍の、勝鬨天地に響きたり、時に夕陽渤海に輝き、『明月和尚山の上にかゝり、日月ともに皇軍の名譽の勝利をことほぎて、慰勞む如く見ゐにけり、嗚呼日の本の國光は、世界に隈なく影さして、仰がぬものこそなかるらん。「仰がぬものこそなかるらん」、

* * * * * * * * * *

◉征露の歌

開國こゝに二千年、外侮一たび受けずして、皇統のさかん極

みなき、「我が日東の大八洲島、その神國を憚からず、口腹の慾滿さんと、無禮の翼羽ばたきて、爪牙を鳴らす鷲の國、西滿州の野に荒れて、慘虐つのる振舞に、『天子一朝赫怒して、膺懲の軍發せらる、時は如月上十日、「萬歳の聲轟々と、八千の艨艟海行けば、十萬の貔貅山を行く、「あゝ弘安の其のむかし、蒙古の使切りてける、日本刀われにあり、咄々露國何ものぞ、『あゝ慶長の春元年、明の封冊破りたる、日本魂われにあり、咄々露國何ものぞ、それ邪は正の敵にして、露國は日本の讎なるぞ、正義のつゝみ鳴らしつゝ、「討て〳〵憎き鷲の國、討て

〈憎き驚の國、城下の盟ひ立つるまで、討ちて國威を輝かせ、討ちて國威を輝かせ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

◉軍神廣瀬中佐

名も高き、渤海灣の咽喉なる、旅順口の戰ひに、籠る露艦を、鎖さんと、「閉塞隊の勇ましく」自から之れに指揮をなし、二度の任務を全ふし、名譽の戰死を遂げにしは鬼中佐とぞ呼はりし、姓は廣瀬名は武夫、頃は三十あまり七年の、三月末の二十七、「闇を冒して西の海、黄海威遠の砲臺を、右と左に

仰ぎ見て、進む必死の決死隊、其れと見るより敵艦は、すは敵なりと驚きて、探海電燈ひらめかせ、射手を揃へて散々に、打出す大砲の彈丸は、雨か霰か白雲の、降り注ぐが如くにて、千雷走り萬雷の、とゞろき渡る其の中を、物ともせずに勇々しくも、港の口に進み寄り、中佐は杉野兵曹長に、兼て積み來し爆藥に、點火の任を命じける、忠勇義烈の兵曹長、艇艙に下りし其刹那、敵の水雷命中し、火藥は點火を待たずして我手用ゐず爆發す、任務も已に遂けたれば、其本艦を乘りすてゝ、端艇に兵士を移らしむ『其時一人の兵曹長、杉野孫七

見ざれば、中佐は聲を張り上げて、杉野はいづくと呼はりつゝ、戰友思ふ眞こゝろに、彈雨の下も打忘れ、三たび船内を捜索し、福井丸の甲板に、呼べど叫べと聲はなし、探ぐれど捜せど影はなし、風は怨みて涙怒り、照らすも凄し探海燈、髪逆立てゝ空仰ぎ、無限の哀涙含みつゝ、端艇に移る其矢先、『又もひらめく探海燈、敵彈雨と降りそゝぎ、彼所此所に落ち來るを、怒りの眼凄ましく、降り來る彈丸を打睨み、部下を思ふの眞こゝろに、中佐は双手を擴げつゝ、身を以て兵士を救はんと、多數の兵士をだきふせぬ、此時敵の一巨彈、空

を掠めて飛來り、廣瀬中佐を倒しけり、立つは血けぶり水けぶり、今までありし軍神の、あゝ勇烈の其すがた、「姿は見にずなりにけり」、血汐たゞよふ艇内に、殘るは哀れ肉一塊、あゝ一片の此肉は、是れぞ忠勇義烈なる、我が軍神の面影ぞ、よしや其身は朽つるとも、其の名は朽ちじ千代八千代、廣瀬武夫といふ名こそ、永く青史に刻まれて、實に軍人の龜鑑ぞと、後の世々まで香ばしく、高き譽はとりぐに、共に世界にうたはれん、「共に世界にうたはれん」。

* * * * * * * * * *

◉赤十字

見渡す限り野も山も、みな砲煙にうづもれて、とゞろく砲の音すごく、天や崩れん地や裂けん、陰々殺氣の其中に「十字の旗こそやさしけれ」吹き立つ風はなまぐさく、紅ゐそめし草の色、筋肉やぶれ骨くだけ、倒れしあまたの負傷者を、助けんとてや擔架もち、十字の旗を靡かせて、天幕さして荷ひ行く、此人々は日の本の、仁と愛とに富む婦人、眞白に細き手をのべて、流るゝ血汐洗ひさり、まくや繃帶白妙の、衣の袖をあげに染め、味方と敵のへだてなく、看護は朝夕いとまなく、「同仁一視ぞたのもしき」あやにかしこき文明の、母といふ名をおひ持ちて、いとねんごろに看護する、心の色は赤十字、「心の色は赤十字」

* * * * * * * *

◉歸鄉兵士

皇國に仇をなし、世界の平和を攪亂す、惡逆無道の讐敵を「打懲せよと畏くも、『我大君の下します、詔をばかしこみて、命を惜まず身を忘れ、すがる妻子を振りすてゝ、海路を渡り異國に、戈を假寢の旅枕、すめらみかどの御惠に、むくひまつ

るは此時と、陸に海にと戰ひて、我が日の本の御光りと、ほまれを共に荷ひつゝ『凱歌謠ふて今日はしも、目出たく故郷に歸るなり、親へよろこべ諸共に、謝せよ里人感謝せよ、彼等の辛苦は幾何ぞ、あられ降る日も雨の夜も、氷の双くろかねの、火玉とびくる其の中も、國と君との其のために、修羅の巷に出入し、萬死の中に生を得て、還り來りし兵士ぞ、祝へよろこべ諸共に、「謝せよ里人感謝せよ。」

* * * * * * * *

◉月下の陣

一

宵の篝火影失せて、木枯ふくや霜白く、夜は更け沈む廣野原、「駒も蹄をくつろげず『音なく冴ゆる秋の月、草葉の露は玉を縫ひ、夕果敢なき秋風も、止みていつしか虫の音の、何を歌うか叢に、楯を褥の武士は、明日とも知らで草枕、夢は何處をめぐるらん、玆に今宵は宿り木の、身は未だ解かぬ鎧下、上行く雁に夢破り、『そゞろに思ふ故郷の、雲井遙にかゝる月、國を思ふの誠心に、家をも如何で忘るべき、只身一つを無き數に、入る西山の月影を、水に結びて明日はまた、駒の手綱をかいとりて、敵營指して驀進、花々しくも戰はん、夜はほの

くと明け渡り、星もかくれて横雲は、茜に染めし朝ぼらけ、
いなゝく駒の勇ましく、いなゝく駒の勇ましく、

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

◉七　卿　落

世は苅菰と亂れつゝ、茜さす日もいと暗く、蟬の小河に霧立ちて、「隔ての雲となりにけり」、あら痛ましや玉尅る、内裏に朝暮宿直せし、實美朝臣に季知卿、壬生澤四條東久世、其外錦小路殿、今は浮草の定めなき、旅にしあれは駒さへも、進み兼ねてぞいなゝつゝ、降りしく雨の絶間なく、涙に袖は濡

れ果てゝ、『これより海山淺茅原、露霜分けて蘆がちる、灘波の浦にたく塩の、からき浮世は物かはと行かんとすれど東山、峰の秋風身に染みて、朝な夕なに聞きなれし、妙法院の鐘の音も、「さゝて今宵は憐れなり」、いつしか暗き雲霧を、拂ひ盡して百敷の、「都の月や見給はん」、

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

◉新　玉（一名松囃）

新玉の、年立歸る春の日に、君のよはひは千歳ふる、松はやしとて數ならぬ、我等如きも許されて、「聞くも、中々面白

や」、皷は四海浪の音、笛は龍王の吟ずる聲、名は高砂の尉と姥、是ぞ盡せぬ妹脊とかや、神の御前は鈴鹿山、惡魔を拂ふ而已ならず、弓矢の譽れ殘されし、田村丸の御威勢は、今が世迄もゆづり葉の、しめ引き廻す井筒より、汲めども盡せぬ若水は、老を養ふたよりとかや、扨其の次は春の花、都に聞へし三條の小鍛治宗近は、心すなほにして神慮に叶ひし名劒を、造り出して今太平の御世となり、古き詩にも有ぞかし、長生殿の裏には春秋に富み、不老門の前には日月遲しと申せしが、其の心をぞ學ばれて、今此の御代と云ふつげの、「とりとりなれや梓弓」、矢竹心の一つなり、又英雄の交はり「たのみ有る中の酒宴かな」、

* * * * * * * * *

◉笠置の御夢

あな畏こきや大君の、夢にちなみの楠は、一天萬乘の大君の御召にあづかりて、時を移さず「笠置の行宮にぞ參りける」、帝は叡感斜ならず、藤房の卿をして仰出されけるは、逆賊北條高時は、奢に長じて天下の政をみだし、萬民塗炭の苦みを受く、然のみならず暴威につのりて大逆を謀るに至る、今は

天下の事を擧げて卿に委ぬ、速に逆賊を亡して叡慮を安んじ奉つれ、卿が策いかにいかにと在りければ、正成謹んで勅答し奉るは、逆賊暴威に耽るとも、御心安く思し召せ、順を以て逆を討つ、勝たずといふの理あらんや、賊に匹夫の勇有りとも、之を計るはいと易し、さはさりながら勝敗は、兵家の常の事なれば、よしや官軍破るとも、大御心を艱ましそ、臣ながらへて世に有れば、必らず賊を滅ぼして、大御心を安め奉る可しと、御受申してまかり出でぬ、さして行く、笠置の山を出しより、天が下には、かくれ家もなし、一度は西海邊に

かくろひし、天つ日かげも後ついに「暗き雲霧をしひらき」、めでたく還幸ましまさせ、我大君の楯となり、我が大君の御船とも、なりてつかへし楠そ、臣の鏡と語り傳へむ、

＊　＊　＊　＊　＊　＊

◉正行の參内

正平四年正行は、吉野の皇居に參内し、四條隆資卿を經て、「心の中をぞ奏しける」「先臣正成勤王の、軍を起し朝敵を、打滅ぼして先帝の、叡慮を安め參らせし、其の後天下又亂れ、逆臣尊氏筑紫より、都をさして攻め上る、正成覺悟を定めけむ

遂に津の國兵庫なる、湊川にて潔く、戰死をこそは遂げたりき、其の時正行漸やくに、十一才になりぬるを、軍の場へは伴なはで、河内に送り歸しつつ、敵を亡ぼし我君の、御代になせよと細々に、遺しゝ訓の語葉は、今なほ耳に止まれり、然るに正行今は早や、年も二十歳になりければ、今に及びて朝敵を、打亡ぼさですごしなば、いつをかまたむ人の身は、思ふにまかせぬ習ひにて、病の爲に死しもせば、君の爲めには不忠なり、父の爲めには不孝なり、されば此度師直と、手痛き戰さつかまつり、彼が首を正行が、手に打取るか正行が、首

を彼れにとらるゝか、二つの中に戰ひの、雌雄を決し申す可し、今度の軍正行が、必死の覺悟に候得ば、今生にては今一度、龍顏拜し奉り、御別をば告ぐるなりと、申しもあへず涙をば、鎧の袖に注ぎつゝ、義心氣色に顯れし、帝は御簾をかゝげさせ、近く召されて正行よ。此程數度の戰ひに、敵の勇氣を摧きしは、叡慮を慰むるに足るぞかし、父子累代の勳功は、深く感ずる所なり、朕は汝を股肱とす、必らず命を全ふし、王家の重きに任せよと、畏き詔有りければ、正行首を地に附けて、是や最後の參内と、「思ひ定めて退きぬ」、かく

て一族郎黨と後醍醐帝の御陵へ參りて御暇申上、如意輪堂の扉にぞ、各々名字を書き連らね、又其奥に矢尻にて

かへらじと兼て思へば梓弓
なき數に入る名をぞとゞむる

と一首の歌を書き殘し、吉野を出でゝ勇ましく、「四條畷に向ひける。四條畷に向ひける」、

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

◉湊川

金剛山は今に有り、湊河原は今に有り、正成公は今ぞなし、然

は有れ只其の山は、崩るゝ事も有ぬべし、昨日の淵は今日の瀬と、「港の川は變るべし」、變らぬも は人の名ぞ、建武の昔正成は、肌の守を取出し、名も櫻井の香はしき、敎を其子正行に、返すがへすも傳へにき、之は一年都攻めの有りし時、下し給ひし綸旨なり、是を汝に與ふなり、我兎に角になるならば、世は尊氏の世となりて、叡慮を腦まし奉らんは、鏡に懸けて見る如し、さはさりながら正行よ、父の子なれば流石にも、忠義の道は兼て知る、弓張月の影暗く、家名を汚す事勿れ、打洩されし郎黨を、憐み扶持し隱家の、吉野の山の奥深

く、月の桂はさゝなみや、流も清き菊水の、旗を再び飜し、敵を千里に逐ひ退けて、叡慮を安じ奉れ、一言半句も私はなし、事に及ばゝ大君の、事を細く言ひ置ひて、手兵七百率ひつゝ、湊川にぞ馳せ向ふ、此時敵の陸軍は、五十萬とぞ聞へける、其大將直義といひて不義非道の人、兄尊氏は水軍の、頭となりて進み來る、和田の岬は義貞が、參萬餘騎にて防ぎしも、敵は見る〳〵岬迄、乘上たれば我兵は、前後に受けし敵と敵、弟正季疾く來れ、玆ぞ命の捨處、目指す直義引捉へ。迷途の旅の供させん、進め進めと諸共に、七度遭ひて又離れ、獅子奮迅に戰ひしも、惡運強き直義を、取逃したる其跡は、七十三騎殘るのみ、身は十一の創口に、唐紅の眞心は、國の爲めなり正季よ、死しての後に何かなす、正季流石答へけり、吾は七度生返り、賊の奴原取殺し、叡慮を安じ奉らん、さなりさなりと正成も、最と笑ましげに肌を脱ぎ、刺違えてぞ朝の露と、果なく消へし四十三、「盛りの花ぞ散りにける」、氣を勵まされ一族の、十六人と五十餘の、從士の人數悉く、死出の旅路を共々に、手に手を採て大丈夫の、譽高きに比ぶれば、「金剛山は高くとも、港川は清くとも、など菊水に及ぶべき」な

ど菊水に及ぶ可き」、

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

◉四條畷の合戰

時しも御代は正平の、三歳の春の初めにて、吉野の山は白妙の、「雪に梢を埋められ」、萠出る木々の下草は、皆足利の足下に、踏れ敷れて哀にも、延る力もなよ竹や、折ても節操變まじと、誓ひし公は去年の冬吉野に詣で大君の、龍顏拜し奉り、亡父正成が先帝に、仕へて忠義を盡しける、其赤心を受繼で、我とも心筑紫潟、浪と寄せ來る賊軍を、防き戰ひ退けて、君

の叡慮を休めんと、思へど我は不幸にも、病の多き身なる故空しく月日を送る内、若しも病氣に侵されて、蓐の内に玉の緒の、消ゆる事の有るなれば、君が爲めには忠ならず、亡き我父には孝ならず、病の爲めに敢なくも、黃泉の鬼とならんより、此所に寄せくる賊軍と、刃を交へて潔よく、命を捨て忠孝の、道を全ふせんものと、思ふ心は有明や、月の君とぞ稱へつる、隆資卿に細々と、告るを何時か大君は、御簾の中より聞し召し、最かしこくも行在の、南の椽の端近く、出御したまいて拜謁を、許し給ひし其の時に、朕は汝を股肱ぞ

と、思へば深き己が身を、厭ひ慎み必らずも、生て歸れと有難き、御勅下し賜はれば、朝臣は地に額つきて只伏拜むばかりにて、答へ奉らん言葉もなく、涙の雨に伏折れて、持げ兼たる風情なり、朝臣は潮く立上り、厚き涙の降かゝる、鎧の袖を拂ひつゝ、徐に行在を退きて、一族郎等隨へて、先の皇帝の御陵に、參詣て前に跪き、戰若も利あらずば、生て返らぬ覺悟故、此の世の別辭告ん爲め、遙々此所に參りしと、いふも濁れる涙聲、濡てぞ重き袂をば、絞りもあへず立ーり、如意輪堂に赴きて、御佛を拜み奉り、夫れより堂の壁の表に、死

を誓ひたる義士の名を記せし數は百餘名、朝臣は鏃取出し、落る涙を拂ひつゝ、氣を張りつめて梓弓、引返さじと思ふなり、無き數に入る忠臣の、名をぞ止むると名歌をば、刻り附け給ひ去ばとて、吉野を發し河内なる、四條畷に打ち向ふ、時は十二月の二十日過ぎ、七日の日にぞ有りにける、三夜の夢は去年の暮、明れば年も改まり、春とは云へどまだ寒き、北山をろし吹くまゝに、旗飜し攻來る、八萬餘騎の賊軍と、四條畷に戰ふて、身をも家をも打忘れ、只大君の御爲めと、矢猛心を振起し、力を極め身を盡し、防きし甲斐も有らばこそ、篠

突く如き矢の雨に、痛くも其の身を痛められ、肉裂け血汐滴りて、今は一歩も進まねば、いざ之迄と大君の、在ませる方を伏し拜み、賊の方をば打ちにらみ、骨肉分けし同胞と、互にさしつさゝれつゝ、飯森山に程近き、四條畷の夕烟、消て歸らぬ旅の空、ふむ道柴の露とこそ、なられし「君ぞ悼まし」き、去れど朝臣の功績は、譽となりて千代までも、後の世迄も著るしく、吉野の花と諸共に、今尚ほ四方に香しく、忠臣孝子の鑑ぞと、「内外の國に薫るなり、内外の國に薫るなり」、

◉城山

夫れ達人は大觀す、拔山蓋世の勇有るも、榮枯は「夢か幻しか」、大隅山の狩倉に眞如の月のかげ清く、無念無想を感ずらん、何を怒るや憤り猪の、俄に檄する數千騎、勇みに勇む隼り雄の、騎虎の勢ひ一徹に、留りがたきぞ是非もなさ、唯身一つを打捨てゝ、若殿原に報ひなむ、明治十年の秋の末へ、諸手の軍打破れ、討ちつ討れつやがて散る、霜の紅葉の紅血汐に、染めど顧みぬ、薩摩武夫のをたけびに、打散る玉は板やうつ、霰たばしる如くにて、面てを向けん方ぞなき、木

魂に響く鯨波の聲、百の雷一時に、落るが如き有樣を、隆盛打ちみてほゝそ笑み、あな勇ましの人々や、亥の年以來養ひし、腕の力もためし見て、心に殘る事もなし、いざ諸共に塵の世を、脱れ出でんは此時と、唯一言を名殘りにて、桐野村田を初めとし、宗徒の輩諸共に、烟りと消へし益丈夫の、「心の中ぞいさましき」。官軍之を望み見て、昨日は陸軍大將、迄君の寵遇世の覺へ、類ひなかりし英雄も、今はあへなく岩崎の、山下露と消へはて、、移れば變る世の中の無情を、深く感じつゝ、無量の思ひ胸に滿ち、唯悄然と隊伍を、と、

のへ目と目を見合す計りなり、折しも吹くや吹き下す、「城山松の夕嵐」、岩間に結ぶ谷水の、無情の音も何となく、悲鳴するかと聞きなされ、「鎧の袖をぬらすらむ」。

* * * * * * *

◉石童丸

筑紫大守名も高き、加藤左衞門重氏は、無情を感じ世を捨てて、「諸國修業に出で給ふ」、殘されたりし妻や子は、思ひ待つ事十餘年、父上高野に有りと聞き、石童丸は母上と、菅の小笠を傾むけて、旅の痛れもいとひなく、漸く高野の禿宿、明

日は逢はんと悦べど、女人禁制の山なれば、母を麓に殘し置き、是非無く石童只獨り、杖をたよりにたよ〳〵と、心細道踏別けて、峰の藥師や瀧不動、手を合せつゝ伏拜み、其の夜は其處に假寢して、笠の屏風に腕枕、諸行無常を告げ渡る、鐘の音いとゞ身にしみて、九百九十の寺々や、峰谷々の阿彌陀佛、菩薩念じて尋ぬれど、父ぞと思ふ人はなし、三日二夜は早や過ぎて、麓の母を案ずれば、後ろに引かるゝ心地して、無名の橋に差掛る、左に花を右に珠數、光明眞言唱へつゝ、苅萱道心降り坂、見上げ見下ろす顏と顏、石童丸の振袖と御僧の

袖ともつれ合ふ、其時石童袖に取すがり、若しこの御山にて、今道心を敎へて給べと乞ふ姿、見れば一人の幼兒が、腰に差した る脇差と、見覺へのある顏せに、さても不思議とおもへども さあらぬ體にもてなして、石童丸に申す樣、たづぬる人の名を書きて、札場に立れば逢ふことも、有らんと聞きて泣き沈む、石童丸を苅萱は、あはれみ給ひ手を取りて、己が住家に連れ歸り、國は何國名は何んと、問はせたまへば涙だぐみ、國は筑前松浦の、加藤左衞門重氏が、忘れ形見の石童丸と、聞て苅萱胸切まり、せき來る涙だ止めあへず、石童其れとさと

りしが、若し父上にては御在さずや、名乗り給へといひければ、あらなつかしや我子かと、言はんとしては名乗り兼ね、其の苅萱は昨年の秋、空しくなりぬと宣へば、又も石童わつと泣き、せめて墓場を教へ給へと請ひたれば、苅萱墓場へ連れ行き指さして、これぞ父の墓なりと、聞て石童涙きたをれ、前後も不知歎く樣、後ろに停む苅萱は、胸も張裂く計りなり、暫時有りて漸くに、石童丸を抱き起し、涕は佛の爲めならず、一度此御山を下りて母上に、此事いふて回向せよと諭されければ、石童泣々山を降りつゝ、母に告げんと來て見れば、哀れ

なるかな母上は、石童丸を待ち兼ねて、麓の野邊に枯れ果つる、葦葉の露と消へ給ふ、嗚呼父上には生別れ、又母上には死に別れ、天にも地にも便なく、後にたよるは姉ばかり、逢ふて此の由語らんと歸りて見れば姉も又、此の世を去りて跡もなし、最早尋ぬる人はなし、高野に上りし其の時に、憐み玉ひし御僧有り、外に便は涕くばかり、亦も高野の苅萱の庵尋ねて御弟子にと、乞はれて苅萱是非もなく、共に連れ立ち國々を、修業なしつゝ信濃なる、國に住居を定めつゝ、師弟と名乗るばかりにて、「親子地藏と唱へよと、「遺言し給ふぞ哀

れなり」、信濃に名高き善光寺、石童寺の本尊に、親子地藏の御在しますなり、嗚呼親子の緣は斯迄に、切つても切れぬものなれば、今は昔しの物語、南無の大悲の地藏尊、「南無や大悲の地藏尊」、

＊　＊　＊　＊　＊　＊

◉錦の御旗

天照らす、日の影うつる眞井の末流も清き瑞穗の國は昔より、「武勇忠義の人多し」、元弘元年の頃とかや、後醍醐帝の三の皇子、大塔の宮と聞ゐしは、出家の身にてましませど、君の御

爲め國の爲め、義兵を擧げて逆臣を、征伐せんとの御企て、早くも賊に洩れ聞へしかば、比叡の奥にも南都にも、身を置き給ふ事難く、熊野を指して落ち給ふ、肱肢の臣は誰々ぞ、赤松律師光林坊木寺の相模武藏坊片岡八郎三河坊平賀の三郎矢田彦七村上義光の九人にて、柿の衣に笈を負ひ、頭巾眉深に被りて、先達造りの山伏か、熊野參りに裝ひて、龍樓鳳闕に人となり、輕軒香車を出でまさぬ、雲上の人の御歩行は、長途如何と御供の、人々危ふく思ひしに、社々の御宿り、宿りくの御務め、露も忘り給はねば、勤修を積める山伏も、見

咎むるもの更になし、由良の湊を見渡せば、沖漕ぐ船の舵を
たへ、浦の濱木綿重幾ともなく波路に遠山渺々と、薄紫の藤
代の、松にかゝれる磯の浪、和歌吹上の浦かけて、月にみ
がける玉津島、光を餘所に伏拜み、長汀曲浦の旅の路、心を
碎く習ひなり、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、哀
れを催す黄昏に、切目の社に着き給ひ、叢祠に袖を片敷きて、
朝家の榮を祈ります」
かくて十津川の、戸野竹原便りて暫時居給へど、爰にも長く
有り兼ねて、高野の方へと落ち賜ふ、茲に妹ケ瀬庄司とて、賊

の一味の士有り、宮を止めて申す樣、此の道通し申しなば、鎌
倉よりは罪せられん、さればとて宮に弓引くは、如何にしても
恐れ多ければ、錦の御旗賜はるか、左なくば御供一人止めて
證據にせんといふ、肢肱の臣は一人だも、いかでか殘し給ふ
可き、詮方なくも御旗を、彼に取して虎の口、僅かに遁れ給
ひける、斯る所に村上四郎義光は、草鞋の緒や切れにけん、遙
かに後れたりしかば、宮に追付申さんと、足疾く急ぐをりし
も有れ、庄司に磑と行合しが、下人のもてる旗見れば、正し
く錦の御旗なり、不思議に思ひ尋ぬれば、事云々と答へける、義

光聞きも敢へずくわつと怒りて打睨み、こはそも如何に何事ぞ、一天四海の主に座します上の御子、朝敵を征討なさん御門出でに、汝等如き下郎等、かゝるふるまい致すかと持ちたる旗を奪ひ取り、大の男を搔ひつかみ、四五丈許り投け附けたる其樣は、獅子の荒れしに異ならず、此の怪力に恐れけん、妹加瀨庄司は一言半句も無くしてすくみける、義光旗を肩に掛け、程無く宮に追附て、御前にひれ伏し事の由、具さに申上げければ宮の御喜び古の、北宮勦が勇氣にも勝されりといと愛てましぬ」、之のみならず義光は、吉野の山の戰ひに、宮に

代りて討死し、御旗に打ちたる日月の、光爭ふ忠心義士と、「たゝへて萬代迄も」、君に仕ふる人臣の、「鑑みとこそは仰がるれ、鑑みと、こそは仰がるれ」

* * * * * * * * * *

◉勿來關

前九后三の戰場に、功名立てし君が威は、北は奥州外の濱、南は遠く白河の、關の此方に至る迄、「知ぬ者とて無りける」、一◎年◎勿◎來◎の◎關◎にき◎て◎、駒を留めて古郷の、山を遙かに眺めみる、君が心の遣る瀨なく、頃は彌生の花盛り、何處も同じ春景色、

君が頭の白髪も、君が戦の白旗も、「關の櫻と諸共に、花と」許りに見へたりける、花は散れども君が名は、一度駒を止めしより、口すさみにも皆人の、言はぬ「ものこそなかりける」

＊　＊　＊　＊　＊　＊

◉兒島高德

元弘二年如月の、小雨しく〳〵笠置山、あやめも分かぬ夜の雨に、指して行くては楠木の蔭だに見にぬ事闇に、荒れ渡りたる人面の心は鬼か蛇の如き」、妖怪變化の賊共は、恐多くも天皇の、龍駕を西の隱岐の海路遙かに移しけり、其有樣今も

尙ほ、史上に見へ身の毛もよだち、胸さへも、寸々にだへいる計り恨む目に、古を睨む外ぞなし、其時兒島高德は、衆を集めて申す樣、仁をなすため身を殺し、義を見てなさぬは勇なきなりと、勵ます詞に勇む武士、共々向ふ船坂の、山の險岨はこれやこれ、天の與へし要害と、身を潛めつゝ堅唾のみ、我れが天皇を奪はんと、待つに甲斐なや鳳輦は、早や山陰に向ひぬと、聞くより松坂の、樹の根岩根踏み碎き、望めば又も鳳輦は、遙に過ぎて後影、「伏拜む計りなり」、今ぞ挫けし勇者の跡を見送りて、高德は天を睨みて地に哭し、姿を變へて

身をやつし、風の晨も雨の夜も、厭はず御跡慕ひつゝ、善き折あらば赤心を、我が天皇に聞え上げ、叡慮を安じ奉らんと、氣は張り弓の撓ゆまぬも守嚴しき扳庇し、障さへ洩さぬ龍姿に、さし足拔足日本刀櫻の老木かき削り、墨手の墨の黑々と、赤き心を書き下す

天莫空勾踐
時非無范蠡

十字の文字は長城の、堅き固や勤王の、記しも賊は明きめくら、群り見るも明鴉、阿房〳〵と笑ふのみ、我か天皇の龍顏も、最と麗はしく暫時の間、愁ひの御眉開きける、斯の如く

に高德が、虎の穴だに恐れなき、虎の子得んと思ひてし、勳は後の世迄も、輝き渡り曇りなき、明治の御代に愛國の、古きを尋ね新らしく、「護りの神と崇めらる」、讀む人々よ心せよ、彼も人なり我も人、「食ふは今だに日の本の」、實のる瑞穗なる飲むは、昔しも今も清き日本の水、鄙屈の腸を洗ひ去り、國を枕に誠忠の、樂しき夢や結ぶべき」

* * * * * * *

◉小督

頃しも秋の半の空、詠め勝ちなる御袖に、涙の露を拂はせ給

ひ、宿直に侍る彈正の大弼仲國を召され、如何に仲國「小督の行衛を知りたるか」、内裏を逃れ出しより、嵯峨の邊に聊の、知已便りてあると聞く、汝如何にもして尋ね出し、此文傳へよとの仰なり、仲國かしこまり只嵯峨の邊と計りにて、主人の名をだに知らざれば、尋ねむ樣はなけれども、小督の殿は世に知られたる、琴の上手に在すれば、今宵最中の月影に、君の御上思し出で調べ給はん事よもあらじ、兎にも角にも尋ね出參らせて、叡慮を安め奉らんと心に思ひ定めつゝ、賢まりぬと聞へあげ、直に御前をまかり立、寮の御馬に打乘りて、隈

なき月に鞭を揭げ、をじかなく此山里と詠じけん、嵯峨野の奥に分け入れば、閃き渡る白露に、尾花が袖も打濕り、鳴きかわしたる虫の音に、浮世の善惡も思れて、獨心を痛めつゝ、家ある毎に立寄りて、問へど知るもの更になし、如何はせんと駒を立て、只茫然として居たりしが、着し寶林寺にや在すらん、龜山近く到りしに、しづがき遙に聞へけり、峯の嵐か松風か尋ぬる君が琴の音かとめつゝ、行けば、一村の松の影なる片折戸、中に聞ふるつま音を、手綱緩めて熟々と、聞けば誠や月花の、御遊のむしろに侍りて、御笛つかうまつりし

時、聽覺へつる調にて、殊更曲は想夫戀、偖は紛れもあらじとて、腰より用笛脱出し、少し計り吹き鳴らし、頓て駒より飛降りて、門をほと〳〵叩きこれは、仲國、内裏より御使に來りたり、開けさせ給へ〳〵と、訪ふに琴彈差し、靜まり却て音もなし、稍やありていたひけしたる小女房、顔計り差出し、怪しの賤が伏屋に内裏より、御使など給はるべきに非ず、門違ひにて御在すらん、仲國は生まじいに依賴しては門さゝれんと思ひければ、是非なく强して内へ入り、妻戸の緣に進み寄り、何迚斯る處に御渡候ぞ、君には明暮思沈ませ給ひ、つ

や〳〵供御も聞し召さず御命さへ、ほと〳〵御覺束なくこそ見へ給へり、斯く申さばうはの空にや御在すらんと、御玉章を參らすれば、あらなつかしの雲井やと、御文顔にあて給ひ暫し言葉も涙の雨に、晴れたる月も曇るらん、仲國も坐にせき來る涙を押へ、兎角慰め參らせつゝ、直衣を絞る計りになりにける、稍やありて御かへり事引結び、女房の裝束一重、取揃へ給ひければ肩に懸け、君にも左こそ待わびお在すらん、重ねて御迎ひに參るべし、待たせ給へと言捨てゝ、「駒を早めて立歸り」、ありし次第を殘りなく、奏する程にほの〳〵と、秋

の長夜も明けにける、「秋の長夜も明けにけり」、

＊　＊　＊

◉千代の春

斯る芽出度御代なれは、國々所々に至るまで、千代の春千歳の秋と樂しむも、これみな君の惠みの深き故ぞかし」、いよいよ君を仰ぎ奉る、思ひ〳〵の殿作り、甍を並べ軒連らね、高殿樓閣を構へつゝ、朝日の光夕月の影、うつる光の輝くは、ともおろかに思はれて、庭には金銀の砂石をしき、四方の圍ひは夥し、不老門を出入る人の袖を連らねて色めくは、是

ぞ名にきく天の羽衣、喜見城の「春の樂みもかくやあらん」箇程治る御代なれば吹風までも枝もならさじと云へば又人として、「君が此代と千代萬代と祈らぬ者こそなかりけり」、

＊　＊　＊

◉小敦盛

祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり、娑羅雙樹の花の色、盛者必滅の理を顯す、おごれるもの久しからず、貴き人も「遂に亡ぶる習なり」、されば此度源氏平家の戰ひに、平家方一族母衣大將の其内に、物の哀れを止めしは、無官の太夫敦盛に

て、諸事の哀を止めたり、敦盛其日の出立は、何時に勝れて花やかに、先づ肌よりば梅香匂ふ肌寄せる、唐紅を召されたり、練絹に種々の糸を以て、秋の野の草盡しを縫ひ出したる直垂に、弓手のてつかい兩面の脛當に、萠をどしの鎧着て、くわ形打たる五枚甲の緒をしめ、鎌倉作りの太刀をはかせ、廿四差したる大中黑の征矢を負ひ、ぬりこめとうの弓を持ち、連錢あし毛なる駒に、梨地のまき繪したる白ふくりんの鞍をかせ、御身かるげに召されしは、左も勇々敷そ見へにける、御一門を初め同じく主上の御供召され、濱に下らせ給ひし、が敦

盛御運の末の悲しさは、かん竹の用笛を内裏に忘れ、若上郎の悲しさは、捨てゝも御出あるならば、斯程の事はあるまじに、敦盛此笛を忘れ置く事は、平家末代の耻辱と思召し、取りに歸らせ給ひしが、斯樣〳〵に時刻を移す其暇に、御一門の御座船も兵船も、遙の沖に押出す、敦盛は力なくして塩屋の方を心掛け、駒に任せて落ち給ふ、心の内こそ不便なり、是は扨置茲に又、武藏の國の住人篠黨の旗がしら、熊谷の次郎直實は、此度一の谷の合戰に、先陣とは申せども、未さまての功名もきわめず、無念至極はなかりけり、天晴此處に勇士の

通れかし、よき敵もあらば押並べ、引組んで分取功名せばやと思ふ折節、敦盛を目に掛け駒引寄せて打乗り、直實頓て大音揚げて名乗る樣、其許に落ちさせ給ふは平家方に於てもよき大將と見奉る、斯く申す某は、武藏の國の住人篠黨の旗頭熊谷次郎直實と申すものなり、源氏方に於ても隱れなきよき敵にて候、きたなくも敵に後を見せ給ふものやな、いざ引返して御勝負候へ、如何に々々と扇を揚げて招かるゝ、敦盛は熊谷とは聞ながら、落つる味方の兵船に心掛け、更に耳にも聞入れず、濱邊を差して急かるゝ、頓て敦盛遙の沖を御覽ず

るに、御座船間近く寄せければ、敦盛は大に悅ひ、腰より日の丸の扇を出し、沖なる船を招かるゝ、船中の人々其内に、門脇殿は最初此由御覽なされ、伊賀の平内左衞門基國を御側に召され、如何に基國あれを見よ、母衣武者の只一騎此船を招くは、左馬頭行盛か又は無官の太夫敦盛か、いづれか見よとの御掟なり、茲に惡七兵衞景淸うけたまわり、某見て參らせんと、白柄の薙刀おつとり杖につき、甲をかたむけ磯邊の方をツク〳〵と打守り、嗚呼痛しの御事やな、あなたにましますは參議經盛卿の御子無官の方にて渡らせ給ふよな、御馬の

毛色鎧の袖印に至る迄、少しも違ふ處はましまさぬ、嗚呼痛はしやとぞ申し上れば、門脇殿聞し召し、敦盛ならば此船を、磯邊に寄せとの御掟なり、水手楫取かしこまり、にわかにろかぢを立直し、船を磯邊に寄せんとすれど、此内より吹き續きたる北風の烈しきに、なごりの浪は今日も立、風は競ふて浪は香車の如くなり、白浪世界にはゞき、眞砂を天に揚げゝれば、宛然雪の山の如くなり、小船こそ自から弓手妻手にも押し廻されるものなるに、殊に勝れし大船にしかも大勢は召されたり、次第〳〵に出れども、漂ふ浪にせかれつゝ、磯邊

に寄すべき樣は更になし、敦盛は此由見るより、斯くては叶ふまじ、いざ彼の舟に泳ぎつかんと駒の手綱をかいくつて、海中へサツと駈け入り、浮きつ沈みつ一たん計りは出たりしが駒逸物とは申せども、逆巻浪にせかれつゝ、泳ぎ兼ねてぞ見へにける、直實此樣見るより如何に平家方の御大將、御座船は遙に程を隔てたり、しかも浪風荒くして、よもや渡らせ給ふまじ、いざ引返して勝負候へ、返し給はぬものならば、某射て參らせんと、弓に矢を打つがひ、そゞろに引てかゝりける、敦盛は落行く駒の手綱を引き止め、暫し思ふ樣、われも

此處を逃れ落ちんとせしに、斯く運の極まる上からは、若も直實がさび失に射止められては、平家末代の耻辱と思召し、いざ茲にて勝負を致さんと相圖をなして、駒の手綱を引返し、海中よりサツト走り上り、染羽のかぶら矢を打ちつがひ、斯くこそ詠じ給ひける

梓弓矢を差しわけて引く時は
返す心をしるか其君

と遊はし給へは、熊谷も心ある弓取なれば、ハツト心に答へ双の鞍をけばりして、頓て返歌に

いたづきのはやはづれんと思ひしに
矢といふ聲にたちぞとゞまる

と返歌をなして「心静に待にける」

◉同　二　段

去程に、敦盛頓て打物の鞘はづし、熊谷に打て掛れば、直實シツカと受止め、追つ追はれつ、受けつ流しつ、二騎並んで面も振らず切り結ぶ、未だ勝負もおへざるに、敦盛イザ組まんと打物彼方へなげ捨てかけよるを、直實共に打物なげ捨て、

馬上ながらムズと組み、互にかわす聲の内、一度にあぶみを踏外し、兩馬が間にドツト落ち、上を下へとかへしける、痛はしや敦盛は、心は猛く勇めども、強氣の熊谷物の數とも思はねば、敦盛を心安く取て押へ、首をかゝんとしけれども、餘り手弱く見へければ、少し引くつろげ參らせて、御相合を見奉るに、薄げしようにかね黑の有樣は、さながら殿上人の年の比十四五計と打見へて、容顏殊に麗しく、餘り心の痛はしさに、扨は中々平家方にては、如何なる御公達にて渡らせ給ふやな、御名字を名乘らせ給へとありければ、敦盛は熊谷に

組しかれ、世にも苦敷息をつき流し、扨て中々武藏の國の熊谷は、文武二道の士とこそ聞きつるに、何とて合戰に法なき事をしたもふやな、我は天子の寵臣として、雲閣の座に連なり、詩歌管絃の道に侍る身なれども、此三歲が程は一門の運盡き果て、いとあこがれしが又武士のいましむる道をもあらく承るに、夫れ武士の名乘るといふは、互の陣に群りてやなぐいゐびらを腰につけ、互に打物拔持て、我は何國の何某と名乘てこそ、勝負は致すなれ、我は又敵に組しかれ下より名乘るといふ事は今ぞ初めて承る熊谷とありければ、直實

承り仰は左なれども首を取り武藏に歸り、此直實が譽を顯はさん其爲めに、御名字名乘らせ給へとありければ、敦盛詞に夫れは隱れもあるまじ、只某が首を取り御邊が主の義經に見せ給へ、若も義經見知らずば、蒲の冠者に見せて問へ、蒲の冠者が見知らずば、此度一の谷の戰に、生け取りのものも多くあるべし、彼の者共に引向て、誰が首ともわからずば其時こそ、名もなきものゝ首と思ひ。只草叢に捨て給へ、直實聞きて、扨は中々武士の、いさめる道を委敷しろし召さるよな世に物憂き者は我等計りに候ひしが、君の御意に隨ひ御首と

らんすれば、親と合戰子と爭ひ花の下なる半日の影、月の前の一夜の燈、清風朧月、飛花落葉の如し、此度の戰に熊谷が參り逢ふ事は、又前世の宿緣と思し召し、御名を名乘らせ給へ、只奉公の其中に後生を吊ひ申すべしとありければ、敦盛は何時迄も名乘るまじと思へども、後生を吊らはれん嬉しさに、我を誰とか思ふらん、我こそは葛原九代の後胤、門脇が二男參議經盛が末子敦盛とは某なり歳は今年十六才軍は今日が初なり、左のみ物を尋ね給ふな早や首取れや熊谷とありければ直實も涕を流し、扨は中々無官の方にて、歳は十六才に

ならせ給ふやな、某が一子小次郎直家も、今年歳は十六才、扨は御同年にてましますよな、直家も、一の谷の戰にさきがけ致し、弓手のかひなに矢を射られ、某に向ひ此矢拔いて給はれと申せしか、如何に直家弓取が、敵と味方の其中で心弱くて如何せん、若しも其手が深手ならば、駒より下りて自害せよ、薄手ならば敵と引組んで打死致たせ篠黨の名をけがすなとハツト睨みしが、其時某方を一目見て、敵の陣所に駈け入るを後姿を見た計り、嗚呼今二目とは見ざりけり、心に掛るは親心、經盛卿も今日も玉の樣なる若君を、磯邊に一人御殘

し、さぞや歎かせ給ふべし、哀れ此直實がつれなき命長らへて武藏に歸り、直家も打死に申し聞せなば誠に母も歎くべし、哀れ貴きも賤しきも、子を思ふ道に迷ふとは、嗚呼今の身の上に知れたり、我子小次郎に思ひ替へ、又もよく〳〵御相合を見奉るに、眉はせんけんたり、兩の髮は秋の蟬の羽にたとへ傳へ繪にし空や叡山の形に相同し、是は古業平の片野の野邊のかり衣、袖打拂ふ雪の下、すいたい紅顏きんしのよそほひ、此若君の御姿、繪に寫すとも爭でか筆には盡し難くぞ見へにける、直實思ふ樣此君一人討奉るとも、千年の齡は保つまじ、

末代迄の物語りに助けばやと思ひ、如何に若君平家方にて仰せらるべき事は、武藏の國の熊谷と組んで候ひしが、我子小次郎に思ひかへ、助け參らせ候と、御父經盛卿に能く〳〵御物語候へと云ふより早く引立て、鎧に付いたるちり打拂ひ、駒に打乘せ奉り、直實共に駒に打乘りて、五町計は見送しが、後の山にときの聲、誰ならんと見返せば、弓手の方には森田平山控へたり、妻手の脇に虎江殿、續て佐々木四ツ目の紋の旗を押いたて、上の山には御大將九郎判官源の義經の白旗を靡かせ、膝元に取ては先一番に武藏坊辨慶、龜井片岡伊勢駿河、源氏

の一族聲々に武藏の國の熊谷は、敵と組んで候ひしが、已に組敷ながら助くるは、必定逆臣と覺ゆたり、二心あらは熊谷共に打取れと、聲掛られて直實は、詮方なくも又も扇を揚げて招よせ、如何に若君あれを御覽候へ、如何にもして行身一人は助け參らせ度は候へど、味方の軍勢雲霞の如く滿々たり、よもや逃らせ給ふまじ、哀れ此直實か手に掛け奉り、後の代の御追善を營み申すべしとありければ、敦盛も涙を流し、夫れ武士は兼て戰場に趣きてはなき身と思へども、此處を逃れ落行く先にて、若しも賤しきものゝ手に掛り、面をさらさん

は無念なり、箇程義理ある武士の手に掛り、死する命はおしからん、早首取れや熊谷と、西に向て手を合せ、覺悟極めておわします、さしも剛なる熊谷も、いづくに太刀を立つべくとも覺へず、暫しが程は途方に暮れていたりしが、斯くてはてじと、猛く心を取り直しぜひに及ばず敦盛の花の首をみずもたまらず打落す、鬼をあざむく熊谷も、心も亂れ氣も絶て、死骸に取り付き、なげける、去れど又弓矢取る身の哀れにやと、漸々心を取り直し、頓て死骸を引立て見るに、鎧の引合せ弓手の脇に、巻物一巻差されたり、妻手の脇にはかん竹の

御笛扇を添へて差されたり、彼の巻物を開き見るに今度都落ちの事委敷記し召されたり、頓て敦盛の死骸を葬り奉り、彼の御笛巻物扇を取りて駒引寄せ打乗りて、大音揚げて呼はる様、平家方無官の太夫敦盛を、武藏の國の熊谷が打取りたりと凱歌ドツト揚げ、陣所差して引て行く、頓て敦盛の首を義經公御實檢なされ、後は直實に賜るゝ、直實殿は弓矢を捨て、もとどり切て武士も捨て、妻子に離れ世を逃れ、鎧の袖を墨に染め、新黑谷に引籠り、法然上人の弟子となり、其名蓮生法師と樣を替へ、三歲が程は終夜百萬遍を唱へ敦盛の追善を

營みける、これも敦盛の最期の時、一言の言葉をかはし又熊谷が武士の情のありし故ぞかし何と聞ても唱へても憂は世の中、義理は熊谷、物の哀れを留めしは、無官の太夫敦盛に蓮生法師の跡の歎きにて「諸事の哀れを止めたり」、

＊　＊　＊　＊　＊　＊

◉春の調

新玉の年の初の壽や、昔し替らず吹揚る、笛と皷の音迄も、春の「調べに聞へつゝ」、玉だれゆられ風立て、舞の袂も長閑なる、神の御垣の老松も、枝を連らね葉を重ね、うべも太夫の影高く、視を君にゆづる葉の、常磐の色ぞ類ひなき、軒端に咲ける梅が枝も、和泉式部のゆかりとや、床敷匂ふ窓の内、「文見る袖にうつりくる」、好文木の名に耻ぢず、又高砂住の江の、松に相生の尉と姥、妹背の契り末長く、四方の海原浪なぎて、吹も靜けき時津風、枝も鳴らさぬ御代の春、千秋樂には民を盃に、君と御國を祝ふなる、「松囃こそ目出度けれ」、

＊　＊　＊　＊　＊　＊

◉吉野落

「命を延ぶる樂みも」年毎の、今日汲替はす

美吉野の、花の立田の紅葉も、夜半の嵐に誘はれて、あだに散り行く時は又、「增して哀れに思ふなり」茲に二階堂出羽の入道道縕は、元弘三年正月に、六萬余騎をしたがへて、大塔の宮の日頃より、籠らせ給ふ大和なる、吉野の城へぞ攻よする、楠摘川のほとりより、吉野の方を見上れば、白旗赤旗錦の旗、御山卸に打靡びき、雲か花かとあやしまれ、麓には敵の大軍すき間なく、甲のほしを輝し、鎧の袖を連ねしは、錦を敷くに異ならず、峯高くして道細く、山けわしくして苔なめらかなり、幾千萬の精兵が、必死に成て攻むるともなどか

落つべくとも思ほへず、かゝる處に同じく十八日卯の刻より、兩陣吐氣をドット揚げ、敵攻上れば攻おろし、互に勇氣をふるひつゝ、此處の谷彼處の峯に馳せ上り、攻め合開き合、射手を揃へて散々に、射立たれど寄手の勢は皆命を知らぬ阪東武士、親うたれても顧みず、主倒れても取合はず、骸を乘越へ〳〵、七日か間息をもつかず攻めたゝかふ、血は草葉を染かばねは路頭に横たはる、かゝるところに敵の案内者岩菊丸は足輕共に下知をなし、金峯山の險を越へ、木の根岩角よち登り、在所々々に火を掛けて、吐氣を作て攻めければ、城

兵も今は前後の敵を防ぎ兼、自害する者もあれば、猛火の中へはせ入て死するもあり」、向ふ敵に引組んで、討死する者もあれば、宮に注進する者もあり、大手の堀はたちまちに、死骸を以て埋めたり、宮はこの由を聞し召し、緋おどしのお鎧に龍頭の甲を召させられ、三尺五寸の小薙刀を脇にはさみ、屈竟の兵共廿餘人、前後左右に引き給ひ、面も振らず切て入り、砂子を飛し煙を立て、東西を打拂ひ南北へ追廻し、爰を詮度と戰ひたまへば、寄手の勢も此廿余人に切り立られて、風に木の葉の散る如く、四方へサット散りにける、宮は是より藏

王堂の大廣間に、ゆらゆら引き上げ玉ひて、軍兵と最後の御酒宴をぞ召されける、此戰に宮の召たる御鎧は、七筋の矢に貫ぬかれ、ほう先と二のうでに、二ケ所の突き傷負はせ玉へど、立たる其矢をも拔かせ玉はず、流るゝ血潮を拭はせ玉はず、敷皮の上に立ながら、大盃を三度迄傾け玉へは、木寺の相模四尺三寸の太刀先きに、敵の首をさし通し、聲高らかに謠ふ樣、戈鋌劒戟を降す事電光の如く、盤若山岩を飛す事急雨の如しと雖も、天帝の身にちかよらず、却て修羅彼か爲めに破らるると太刀振りかざし舞ひたる彼の漢楚の鴻門に楚の

項伯と項荘と劔を抜て舞ひし時、樊會庭に立ちながら、幕をかゝげて項王を、にらみし勢も「かくやと思ひ知られたり」

＊　＊　＊　＊　＊　＊

◉同　二　段

去程に村上彦四郎義光は、殊にはげ敷戦ひし故、敵に矢十六筋を射つけられ、箙中の節や袖摺の節より折れて立たるは、枯野に殘る玉萩の、「風に靡びくが如くなり」、立たる其矢をも拔くに暇なく、宮の御前にひれ伏して、一の木戸は早破れ、今二の木戸にて支ふれど、連日の戰に軍兵共は皆討死し、迚も

籠城覺束なし、敵四方を圍まぬ其内に、早く落させ給ふ〻し、臣は恐れ多き事ながら、召させられたる御直垂や、御物具を頂載し、御諱をもおかし參らせて、茲にて戰死仕らんと、忠義面に顯はれ、いと懇ろに申上れば、宮は哀れと思し召し、如何でか去事のあるべきぞ、死なば處を替へずして、吉野の山にかんばしき、名を殘さんとのたまへば、義光これを聞きも敢へず、嗚呼淺間敷仰かな、昔の漢の高祖が滎陽に圍まれしとき、紀信高祖の眞似をなし、楚を欺かんと乞ひたりしに、高祖はこれを赦したり、これ等の御覺悟あらせられずして、よ

くも天下の大事を思し立れたり、早物の具下し賜はれと、御鎧の上帯解き奉れば、宮は實にとや思しけん、直垂も御鎧もぬかせたまひて、義光に手づから渡しのたもふ樣、我若し生きのびたらば、汝が後生を吊らはん、若又討死なしたらば同じ冥土に伴ふべし、是今生の別れぞと、言葉すくなにのたまひて、なみだながらに落させ給ふ、義光もせき來る涙をおさへつゝ、木戸のやぐらに馳せ登り、大音あげて名乘る樣、我はこれ神武天皇より九十六代の孫、今の帝の第三の皇子、一品兵部卿護良親王なり、逆臣ばらに惱まされ、恨を泉下に報

ひんため、只今自害する所なり、これを見て汝等が身に備へたる、武運つき腹を切ん其時の手本にせよと呼はりて鎧をぬひで投げ落し、錦の直垂に練貫のふたへ小袖をひきくつろげもろはだぬぎて一刀を、左の腹へグサト立、眞一文字に引廻し、あげに染みたるはらわたを、櫓の板に投げつけて、太刀先きくわへうつ伏しに伏して果たる義光の、最後の樣こそ勇ましけれ、敵兵これを見て、大塔の宮は御自害召されたり、御首たまわらんといふ儘に、四方の圍を打ち捨て、櫓の上に馳せ集る宮はこれと引違ひ、天の河へと落ちさせ玉ふに、敵五

百餘騎道を遮ぎりければ、義光の一子村上兵衛藏人義隆は父のをしへに從ひて、一人こゝに踏止まり、追ひ來る敵の馬の諸ひざ薙ぎては切すへ、平くび打ては刎ね落し、右へ突きの、け左へけ倒し、飛蝶の如く飛び廻り、猛虎の如くたけりたて、九折なる細道に、敵五百余騎を引き受けて、半時計戰ひしが、如何に義隆剛のものとはいへ、其身鐵石にあらざれば、深手の矢創十余ケ所、淺手の創は數知れず、今は是迄とや思ひけん、とある竹林に馳せ入て、腹かき切てうせにける、此隙に宮は虎口を逃れ高野山へと落ち玉ひしは村上父子がみよし野に、「花と散りにし其いさを」、立田の秋のもみぢ葉の、赤き心に依るとかや、赤き心によるとかや」、

* * * * * * * * * *

◉老蘇の森

數ならぬ身さへ年の積るかな、老は人をも嫌はざりけりと「つられ置かれし言葉が」今身の上に知られたり、されば此の世に生れ來て、生老病死の四の苦は、逃がるる人とて更になし、此の又四の苦の中に、いづれさべつはなけれども、中にも老苦ぞあわれなり、天の事を我身になして思やるに、古へは容

顔美麗の姿にし、月や花やと人にも見られ、假そめの道行ぶりに花をも送られて、文玉章を取りかはす、傘のはづれの暇よりも、人をみそむる目もとまで、嗚呼はづかしやと思いし事も「夢かとさめてぞ昔なり」、只人間の姿た見る度に、くやしき年はますかがみ、涙にもるる哀れさを、詩にも歌にもしるさるる、自髪砂麗一夢の中、さらば古き歌にもよまれたる、昨日迄乘て遊びし竹の駒、今日は早や老の阪行くつにとたのまんかはり行く鏡の影を見る度に、老蘇の森のなげきをぞする、と、つらねをかれし言の葉が、「今身の上に知られたり」、只人間の此の世に有るはうたたねの、「夢かうつつの間なり」、

* * * * * * *

◉兵六物語

眼疾なる人は必らず三體の月を拜み、心臆する者は必らず鬼畜の妖怪に魔する、茄子を踏で蝦蟇と驚き、繩の横るを見て蛇の蟠かまるかと膽を消すは、皆な是れ己れの氣騷がしうして、本然の心氣修まらざるが故なり、去れば心氣修まらざれば、何れの國に行とても、然も化物共に腦まされざるはなし、本心專一にして元氣精神膽魄欠くる事なければ、何れの所よ

りか邪氣を引き、妖怪の目寄を生ぜんや、兵六の如きは心氣本より修まらざるが故に、三目錢目の猿阿彌が危きをのがれ、震ひ怖れて行く處、世の中に道こそなけれ魔虫原、山の奥にも化物計り何と菖蒲の谷蔭や、目口も讀めぬ面魂の無面相の小坊主唯だ獨りはだかにて、兵六が歩むに添ひ附來る、兵六急げば己も急ぐ、止まれば又己れも止まる、走る時は己も走り、靜に行けば小坊主も、靜かに歩みつくること、恰も影の形に從ふが如し、兵六それとおそけ立ち、聲亂らげていふ樣、やをれ何物の小忰ぞ、何の用事ありて我道行く後につき來る

ぞ、坊主曰く我こそは鞍馬山天狗の落胤にて闇間小坊主といふものなり、此比巣立の雛なれど、自然に備へたる自慢の力相撲は現に山で習ふたぞ、いで試に勝負せよと飛びかくれば己れ似合ぬ小しやく物いでや刀は引出物、只一討と侮りて二つになれと切り付ければ、ひらりとくゞる妻手の下、突かんとすれば弓手の脇へ飛び逃る、是は仕たりと岩角松が根は如何程も切りたたかるも甲斐そなし、其自在なる事電光のきらめくが如し、又熊坂の長範が物見の松の戰に左も似たり、今はせん方なく、太刀をなげすて、大手を廣げて捕らへんとす

れば、小坊主早くも俯ぎ尻を鋒立て、紫尻紅り引張りて御峰入を毎もなさると承はる大和ならねど吉野路や、御牧の馬餞によびを吹とは是なりと、ぶんと一聲合圖すれば、伏勢一度にどづと起り、久敷茲に松の上藪の内より土手の上、黑い小坊主目無小坊主鼻かけ小坊主先手として、十重二十重と取り圍み、己れ同志を寄せ太鼓手拍子打てたぐり掛る、兵六叫び て云ふ樣は、今日は如何なる變な黃昏、ゆるしてくれや小坊主共、堪辨せよと働らけど、皆毒色の小坊主吸付き舞付きかじりつき、爰に五月の菖蒲谷、蓬と離れはせんわいなと心付き兼ねて習し光明眞言、此の時なりと早速二邪神の名號唱へかくれば、實にも梵呪の驗ありて、闇間坊主は散々に茸は鹽の塩垂れて、程なく消へて失にける、是は不思議と見廻せば始めて知りし早松茸、折り知り顏に生出でたるを頭殘らず蹈み折られ、道の行く手に倒れしを、惜まぬ人こそなかりける故に迷ひの目寄せり偏に八百屋の事欠くと後にぞ思ひ知られたり

◉那須與市

* * * * * * *

屋島の内裏の方なる牟禮高松の在家にあたり、火の手有りといふ程に、見る見る四方に廣がりて、「黒煙天をこがしけり」、阿波の民部大音揚げて、今の火の手は手過にあらず、敵より火を掛けたりと覺ゆるなり、軍の用意せよと走せ廻る、時は元暦二年二月二十八日、まだ東雲の程なれば、城中俄に騷ぎ立ち、上を下へと返しつつ、制止も聞かで混亂し、主を捨親を顧りみず、我先にと逃迷ふ、斯る處に源氏の大將九郎判官義經は、紺地錦の直垂に、紫裾濃の鎧、小鍬形打たる白星の甲の緒をしめ、紅の母衣懸けて、二十四指したる小中黒の征

矢を負ひ、重藤の弓に金作の太刀を佩き、黒き馬の太く逞ましきに、白覆輪の鞍を置き、畠山重忠熊谷直實平山季重土肥實平佐々木高綱其外宗徒の郎黨を引具して、城の追手に寄せ來り、木戸の内目掛けて切て入れば、平家方に於ては音に聞へし越中の次郎兵衛盛繼上總の惡七兵衛景清等切先き揃へて打て出ず、追ひつ捲りつ受け流し、鎬ぎを削り鍔を破り、火花を散して攻め戰ふ、組て刺違ふ者も有れば、眞甲切割られて倒るゝあり、手負を助すくる暇まなく死體をあぐる隙もなし、牟禮高松の黒煙は次第〳〵に追ひ來り、已に矢倉も落ち

たれば、平家も今は之迄と皆々船に打ち乗りて、沖を遙かに漕ぎ出でぬ、行方定めぬ波の上須磨や明石の浦々も、寄るべなきさの捨小舟、をきふしなれも知らま弓、いつしか今は引きかへて、今日の味方も明日は敵、敵か味方か矢と楯の淵瀬しらぬ舟の中、心細くも帆を揚げて、風に任かする身の上は、思ひ知られて哀れなる、爰に平家の陣中より、花やかに飾りたる一葉の舟沖に向ひて漕ぎ寄する、頃は二月廿日の事なれば、霞みも風に打ちなびき、柳の五重に紅の袴着て袖笠被ける女房有り、日の丸の扇を竿に挿み、舟の舳頭に指し立て、是れ

を射よとぞ招ぎける、此の女房こそ建禮門院の后立の時、千人の中より撰まれたりし玉虫の前、舞の上手と聞へけれ、歳は今年十九歳、雲のびんづら霞の眉、姿貌に至る迄繪にかくとも、爭でか筆に及ぶべき、折節夕陽の映ひて「いとゞ色こそ増しにけり」、

* * * * * * * * *

◉同 二 段

鬼を欺むく丈夫は、互に生死を爭ひて、船と陸とに立ち分れ、弓矢たばさみ拳を握り、にらみ合ひたる折にしも、あな面自

の景色やと人皆ともにいひはやす、そゞろ浮き立つ人心、波も玉散る海の面、花に霞に別れ來し、都の春の空おしも思ひ浮べて眺めつゝ、判官之れを見給ひて、畠山重忠を召され、如何に重忠彼の扇射よといふに射ずして置くも無念なり、汝一矢に打落せと有りければ重忠畏りて、君の仰家の面目此上なき事と存ずれど、之れは由々しき晴れの術なり、重忠打物取ては、鬼神といへど更に辭退は仕らねど、弓矢の藝はつたなく候へば、もしや射損じて敵の笑を受け候はゞ、重忠の耻はさる事なれど、源家一族の御瑕瑾と存ずるなり、そも〳〵下野

國の住人那須の太郎助宗が子十郎兄弟は、弓矢の達人と承はれば、箇樣の小物に賢く仕らんと申し上げれば、直ちに十郎をぞ召されける、十郎畏まり御諚の上に仔細申す可く候はねども、去年一の谷坂落しの時、馬弱くして弓手の臂を砂に突かせ待べりしかば、疵なほ癒ねず候ひて定の矢仕るべくも候はず、弟與一宗高は一定仕り候はん、仰付られ候へと「弟にぞ讓りける」、

* * * * * * *

●同 三段

宗高其の日の出立ちは、紺むらごの直垂に、緋威の鎧着て、鷹角反の甲を猪首に着なし、二十四指したる中黒の矢を負ひ、重藤の弓を持ち、赤銅作りの太刀を佩き、さびかすげの馬の逞しきに、洲崎に千鳥の散したる貝鞍置てぞ乘りにける、判官の召に從ひ馬より下り、甲を高紐に懸けて畏まる、判官申されける樣、あれなる扇仕れ晴の所作なるぞ不覺すなと、宗高承り仔細申さんとするを、伊勢の三郎後藤兵衛など、面々の故障に日も早暮れんとす兄の十郎さし申上たる上は仔細候まじ、海上暗くならばゆゝしき味方の大事なり、疾く〳〵急ぎ

玉へと言ひければ、宗高せん方なく甲を童にもたせ、烏帽子引立て薄紅梅の鉢巻して、手綱かひくり扇の方へぞ向ひける、生年十七の若武者なれば、色白くして小髭生ひ、弓の取り樣馬の乘姿、優なる男子と見へにける、波打際に打寄せ見れば、弓手の方には主上を初め奉り、國母建禮門院の北の政所二位殿官女、其の外船を漕ぎ並べ、櫻梅桃李と飾り立て、屋形の前後御簾も凡帳もさゝめきたり、妻手の沖には平家の大將軍大臣殿を始めとし、平大納言敎盛新中納言知盛以下、平家の一門其の餘の諸將居並びて、數百の兵船を乘浮べ、鎧の袖を列

ねて是を見る、後の方には源氏方の總大將九郎判官義經を始めとし、諸大將に至る迄、各々騎を乘揃へて　拳を握りかたづをのみ鳴を靜めて音もなし、其所しも遠淺なれば、鎧の菱縫は板鞍瓜の濡るまで打入てはやりにはやる我が駒を、手綱ゆりすへ靜むれど、寄する小浪に物惧れ、足も止めず狂ひける、扇の方を見渡せば、間は七段ばかり隔てたり、折しも西風吹來り、舟は波間に漂ひて扇もことに定まらず、風のまに〳〵廻りける、宗高運の極りと、眼を閉ぢ心を靜め、南無八幡大菩薩、別けて下野國那須大明神、弓矢の冥加有るならば、

扇の座席を定め給へ、源氏の運盡き家の果報も是れまでなれば、矢を放たぬ先に海中に沈め給へと、心に深く祈念して、眼を開き打見れば、風も少しは吹き弱り、扇も座席定まりぬ、偖は神力指添賜へるか、我が物なりと思ひつつ、矢先の面の日の丸は、日を射るの恐れあり、要のほとりを、射切らんと、心を靜めて切り放なつ、其矢海上遠く鳴り響き、狙ひ違はず要より、一寸ばかり上を射切たり、要は舟に止まりて法は空に舞ひ揚り、暫しがほどはさまよいて、海中へとぞ落ちにける、折節夕日に輝きて、波に漂ふ有樣は、立田の山の秋の暮、初

瀬の紅葉にとならず、源氏は鞍の前輪を叩き箙をたゝき、平家は舷を打ち鳴らし、どつと揚げたる鯨波の聲、山も崩れて海も湧くばかり、漸しは鳴りも「止まざりける」、嗚呼宗高が此の日の譽れ、幾萬年を經とても、朽ぬ「程こそ目出たけれ」

* * * * * * * * *

◉迷悟もどき

迷ふが故に三界は暗し、一心悟れば十方世界は廣くして、地獄も餓鬼も我に有り、「佛も淨土も他にあらず」、佛とは何をいわ間の苔席、只其儘の姿にて慈悲より外の宿心はなし、諸事

何事も腹は立つとも言葉はのこせ、言葉少なく品多くして、濁る心を速やかに、いつも人には情あれ、なさけは人の爲めならず、廻り廻りて小車の後は我身に向ひ來る、惡まるる人には猶ほよくしなへ見よ、「後には深き友となる」、仁者に敵なし、されば古人の言葉にも、聖人は人をそしらず、大海は塵をはらばず、善惡は友にこそよれ我が良きに人の惡しきは無きものよ、「友は鏡」となるものぞかし」、皆人の彌陀頼む心は西へうつせみの「もぬけはてたる身こそやすけれ」

* * * * * * * * *

◉飛鳥川

此の里の人の心か飛鳥川、淵瀬と變はる習ひにて、時も浮世と移れば變る、假の此の世に生れ來て、花を見て慰まんと、又來る春を待わぶる、天の戸の「明け行く千代の初春に」、谷の戸出づる鶯の、初音の長閑に遠方の、山も霞か立そめて、梅が香深きくらぶ山、花の明く行くみよし野の、山も麓も白雲の、かかる櫻にうづもれて、霞みかねたる花衣、樣々袖をしぼりつつ、又見ぬ花の何日の間に、夢の昔と散り果てて色をもあらし山、勇みし駒を引とめて、井手の玉川山吹の、岩根

にさける影見ゐて、流るる水の花やかに、濃きも薄きも紫の、色むつまじき廣澤の、池の汀のかきつばた、咲亂れたる花衣、着つゝ馴れたる身なれども、色のゆかりのなつかしき、其の名も高き田子の浦、千代も變らぬ松が枝に、音させかゝる藤浪の、深き色香に浮されて、寄る方もなき身となりぬ、玉川の月もおぼろに影さへて、何とか思ひ忍び音の山郭公、音づる何時暮れ行かん秋の空、昨日も今日も又明日も、來たらん秋の玉川の萩越へて、色なる浪に住み馴れし、隈なき月を宮城野の、萩の錦を着て見んと、名も高瀬のもみぢ葉の錦織

り敷きて、昨日と聞くも甲斐なきいつの間に、秋の半や過ぎぬらん、夫れ人間の假の此世と申せ共、其中は南陽縣の菊水の流れを汲んで「齡を延ぶる千代の秋」、色香も深く替はして咲ける白菊の花、命も我が身に白菊の、年月もいつの間に「積るも知らで幾千代も」花紅葉、鳥の色香に浮かされて、世を渡る「御代こそ目出たけれ」、

＊　＊　＊

◉王昭君

問ず語り誰聞けとそか打わぶる、身の憂きをしる山ほととぎす、軒の草忍ぶとすれど秋ふけて、「齡ひ果たる虫と我れかな」、別れては露の命のをしからぬ、夫一生は風前の光、悲は骨髓に通りて形は憔悴と衰へたり、ただ何事もいもせの契り、淺衣の薄き緣にしとなりはて、哀れはかなき我身かな、一度君と別れては遂に相逢ふ事もなし、いふてつきせぬ千山萬水の雲、夜もすがら心に掛けて者思ふ身は、君に逢ふよの嗚呼夢だにも見ず、今世の中に物思ふ身は、我身ばかりかと思へども又昔を傳へ聞く時は、王昭君の其古は、漢の帝の美人にて、御寵愛はたぐひなく、誠に殿上に類もなき雲の上人にて、

さしもゆゝしく御有せしが、如何なる人の讒言にや、胡國と
いへる「遠國へ、流され給ふぞ哀れなり」、王昭君は今は早や
住なれし花の都を、涙と共に立出る、或時は船に召され、又
或時は殊にけわしき山を越へ、餘り我身の悲しきに、駒の上
にて琵琶をば彈じ、故郷戀しき歌の曲樣々に吟じ給びしかば、
風勢水音皆悉く其の腸を斷とかや、帝も之を聞し召し、御悲
歎のあまりにや、龍顏に涙を催ほさせ給ふぞ有難き、されど
綸言汗の如くにして、再び召し返へさるゝさたもなし、是れ
は我朝彼は胡國夷の朝、春は藁屋の夜半の雨、乾坤萬里と隔

つれども、物思ふ身は異ならず、流れも同じ水なれど、「淵瀬
と變るが如くなり」、只だ何事も杜鵑血に鳴いて何ぞ腸を斷と
かや、しばし口を結すんで只「三春をすごさんにはよしなか
りける」、

◉蓬萊山

目出度やな、君が惠は久方の、光り長閑けき春の日に、不老
門を立出て「四方の氣色を眺むれば」、峰の小松に雛鶴住みて、
谷の小川に鯛遊ぶ、千代に八千代にさゞれ石の、岩ほとなり

て苔のむすまでと命ながらへ、雨土くれを破らじ風枝をならきじといへば、又堯舜の御代も斯く有らん、斯ほど治まる御代なれば、千草萬木五穀成就して、上には金殿樓閣のいらかを並べ、下には民のかまどを厚くして、仁義正しき御代なれば、蓬萊山とは之とかや、君が代の千歳の松も常磐色、變らぬ御代の例しには、天長地久と「國も豐かに治まりて」、弓は袋に「劒は箱に納めおく」、諫鼓苔深くして「鳥も中々をどろく樣ぞなかりける」、

◉武藏野

武藏野に草は種々多けれど摘菜とすれば偖ても少なし、片人は若き時より「只徒づらに日を送り」、才智藝能のなき人は、寶の山に入りながら、空しく歸るが如くなり、たまたま人間界に生れきて、眞如の玉を磨かずば、人と生れし甲斐ぞなし、又いつの時にか磨くべき、賴まれぬ世にも有るかな、月草葉の露の身なれども、假令高位長者の身となれど、七珍萬寶充ちて、榮華に誇る樂しみも、一夜の夢の如くなる、歡樂極りて哀情多しと、古人の簡にもしるさるゝ、さらばこそ生々

世々の樂しみも、心の中の月や花、是を樂しむ人もなし、會者定離、生者必滅は世のならい、春さり秋は蟬の聲とても、はかなき憂きを引き寄せて、結へば草のいほりにて、「とくれば もとの野原なり」、少なきを足れりともし れ、滿ちぬれば月も程なく欠くる十六夜の空や「人の身の上と知られたり」、

＊　＊　＊　＊　＊　＊

◉俊基東下り

俊基朝臣は七月十一日に、六波羅へ召捕れて、關東へ送られ給ふ、再犯赦さゞるは、法令の定むる所なれば何と陳ずるとも赦されじ、路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二の間をば離れじと、思設けてぞ出られける、落花の雪に踏ふまよふ、交野の春の櫻がり、紅葉の錦着てかへる、嵐の山の秋の暮、一夜を明す程だにも、旅寢となれば物うきに、恩愛の契り淺からぬ、我故郷の妻子をば、行方も知らず思ひおき、年久しくも住なれし、九重の都をば、今を限りとかへり見て思はぬ旅に出たまふ、心の中ぞ哀れなる、憂をもとめぬ逢坂の、關の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱、沖を遙に見渡せば、鹽ならぬ海に濡れ行く、身を浮船のうきしづみ、駒

もとゞろと踏みならす、勢多の長橋うちわたり、行きかふ人にあふみ路や、世をうねの野になく田鶴も、子を思ふかと哀れなり、時雨もいたくもる山の、木の下つゆに袖濡れて、風に露ちる篠原や、笹わぐる道を過ゆけば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見にわかず、ものを思へは夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒を止めてかへり見る、故郷を雲や隔つらむ、番場醒ケ井かしは原、不破の關屋は荒はてて、猶もるものは秋の雨、いつか我身のをはりなる、熱田の八劔伏おがみ、潮干に今やなるみ潟、傾く月の道見にて、明けぬ暮れぬと行く

道の、末は何處ととふたふみ、濱名の湖の夕潮に、引人もなき捨小舟、沈み果たる身にしあれば、誰かあはれとゆふぐれの、入相なれば今はとて、池田の宿につきたまふ、元暦元年の頃とかよ、重衡中將の東夷の爲に囚はれて、此宿に着たまひしに

東路の丹生の小屋のいぶせきに
ふるさといかに戀しかるらむ

と長者の女かよみたりし、その古の哀まで、思殘さぬ涙なり、旅館の燈幽にして鷄鳴曉を催せば、匹馬風に嘶きて、天龍河

をうち渡り、小夜の中山越にゆけば、白雪路を埋み來て、そこともしらぬ夕暮に、家郷の天を望みても、むかし西行法師の命なりけりと詠じつつ、二度越にしあとまでも、羨ましくぞ思はれける、隙行く駒の足早み、日已に亭午に昇れば、餉まゐらする程とて、輿を庭前に舁おろし、轅を叩きて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひたまふに、菊川と申すなりと答へければ、承久の合戰の時、院宣書たりし咎によりて、光親卿關東へ、召下されしかば、この宿にて誅せられしとき、

昔南陽縣菊水、汲下流而延齡、

今東海道菊河、宿西岸而終命、

と書きたりし、遠き昔の筆のあと、今は我身の上になり、哀やいとゞまさりけむ、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞかかれける

いにしへもかゝる例をきく河の
同じながれに身をや沈めむ

大井河を過たまへば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の、嵐の山の花盛り、龍頭鷁首の船に乘り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今はふたたび見ぬ世の夢となりぬと思ひつゞけ

給ふ、島田藤枝にかかりて、岡部の眞葛裏枯れて、ものかなしさ夕暮に、宇都の山邊を越ゑ行けば、蔦楓いと茂りて道もなし、昔業平の中將の住家を求めて、東の方に下るとて、夢にも人に逢ぬなりけりと、よみたりしも、かくやと思ひ知られたり、清見潟をすぎたまへば、都にかへる夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとど涙を催され、向はいづこ三保が崎、興津蒲原打ちすぎて富士の高根を見たまへば、雪の中より起つ煙り、上なき思ひに比べつゝ、明る霞に松見ゑて、浮島が原をすぎ行けば、潮干やあさき船浮きて、おりたつ田子のみづ

からも、浮世をめぐる車がへし、竹の下道ゆきなやむ、足柄山の嶺より、大磯小磯見下して、袖にも波はこゆるぎの急ぐとしもはなけれども、日數つもれば七月二十六日の暮ほどに、鎌倉にこそつきたまひけれ、

* * * * * * * *

◉篠原合戰

嵐にきそふ櫻花、散りて惜まぬ武夫の「心のうちこそ勇ましけれ」、さても此度篠原の合戰に、武藏の國の住人長井の齋藤別當實盛は、赤地の直垂に萠黃おどしの鎧着て、鍬形打ちた

る兜の緒をしめ、金つくりの太刀を佩き、二十四さしたる切符の矢を負ひ、滋藤の弓を持ちて、連錢蘆毛なる駒に、金覆輪の鞍を置きてぞ召されける、已に味方の軍勢ば秋の木の葉のそれならで、落ち行く中に只一騎、返せ〳〵と攻め給ふ、斯かる所に木曾の方より「手塚の太郎進み出で、あらやさし如何なる人にて渡らせ給ふや、味方の御勢は落行き候に、只一騎殘らせ給ふぞ名乘らせ給へとありければ、先づ斯くいふ御身こそ誰ならん、光盛某は信濃の國の住人、手塚の太郎光盛なり、さてはよき敵に候かし、されど我れ御身を探るにあらずして、思ふ仔細のあるなれば、わざと名乘りは致さず、されば手塚殿、「いざ寄れ勝負を決せんと、駒の手綱をかひくりて、馳せ並ぶ所に手塚の郎等、主討せじと中にへだたり、實盛に押し並んでむづと組む、あつばれおのれは日本一の剛の者と組みて失すよなと、乘りたる鞍の前輪に手塚の郎等を押しつけつ、拔く手も見せず首かき、切つて落せば「手塚の太郎弓手に迴り、草摺をたたみあげ二刀さす所をむんずと組み互ひにかわす聲のうち、一度に鐙を踏みはづし、兩馬が間にどつと落ち、上を下へと返しける、痛しや實盛は、心は矢猛

にはやれども、軍には已に疲れ、其上老武者の悲しさは、風に枯木の力なく、哀れ義の爲に骸を戰場に晒し、「終に篠原の露と消へ給ふ、されば聞く人見る人諸共に、あな勇ましき武夫とほめたゝへぬはなかりけり、賞めたゝへぬはなかりけり

＊　＊　＊　＊　＊　＊

◉同　二　段

去る程に、手塚の太郎光盛は、木曾の御前に畏り、某異樣の武士と引組みて、「首討ち取りて參りたり、「大將かと見ればつゝく勢もなし、又侍かと思へば、錦の直垂を着したり、名乘

れ〳〵と攻め候へど、遂に名乘は候はず、聲は坂東聲にて候ひつると申上ぐれば、木曾殿御覽候へて、さては齋藤別當實盛か、さあらんには鬢髭の黑きこそ不思議なれ、樋口の次郎兼光は、年頃馴れ遊びて見知りたれば、樋口呼べよと召されける、樋口次郎只一目見て、あなむざん、齋藤別當實盛にて候ひけると、暫し言葉もなかりけり、それならんには早や七十にも餘り、白髮にこそはなりぬらんに、鬢髭の黑きはいかにと宣ひぬ、樋口の次郎やゝありて涙を抑へ、今其の由を申しあげんと思ひ候ひしに、餘り哀に覺ゆ候ふて、先づ不覺の

涙のこぼれ候ひける、實盛常に申しゝは、六十に餘りて戰へば、若殿原と爭ひて、先をかけんも大人氣なし、さりとては老武者と、人々にあなどられんも口惜しかるべきに、去れば戰場にのぞみなば、鬢髭を墨に染め我れさきに討死すべきよし、常に申し候ひしが、誠に染めて候ひき、御洗はせ御覽候へと申しける、木曾殿はさもあらんとて直に洗はせ御覽ずるに墨は流れて白髮の「姿とこそはなりにける、實に名を惜む弓取は、誰もかくこそあるべけれ、茲に又實盛が錦の直垂を着たる事私ならぬ望なり、實盛元は越前の國の者にて候ひしが、近來後領のつけられて武藏の長井にこそは住居せり、實盛都を出し時、宗盛公に申すやう、「某此度北國へ下り候はゞ、定めて討死仕るべし、事のたとへに故郷へ、錦を着て歸ると申す事の候へば、老後の思出に、錦の直垂を御免候へと申しける、宗盛公はやさしうも、申たりけるものかなと、赤地の錦の直垂を「下し賜ふぞ有難き、されば古へ朱買臣は、會稽山に飜し、今齋藤別當は、名を北國の岐に揚ぐとかや、かくれなかりし弓取の、名は末代までも香ばしく、「名は末代までも香ばしゝ」

◉熊本籠城

西も東も皆敵ぞ、南も北も皆敵ぞ、寄せ來る敵は不知火の、筑紫のはてや薩摩潟、世にも名高き猛夫の、たけり狂ふて攻め來り、西九州に名も高き「熊本城を圍みける」、敵の總督隆盛は、古今無双の豪傑で、之に從ふ大將は、桐野篠原村田など、中にも逸見十郎太、慓悍決死の烈大夫、其の外兵士二三萬、何れも劣らぬ薩摩武士、進み打出す砲聲は、天地も崩るゝばかりなり、天地も崩れ山河は、裂けたるためしのあればとて、動かぬものは君が御代、城の中なる官軍は、忠義の旗を振りかざし、死を見る歸するが如くなり、唯一筋に國の爲め、進み進みて防戰す、過ぎし普佛の戰に、メッツの城の降りしは、長き青史を汚したり、夫れには有らで城中は、千早の城の楠公か青陽城の張巡か、谷少將を初めとし、下は兵士に至る迄、家をも身をも打忘すれ、一心不亂に防戰す、此時都の方よりは、錦の御旗飜がへし、多くの官軍出陣す、されども城の連絡は、空飛ぶ鳥のそれならで、翼なければ通ひ得ず、城中城外諸共に、音信する由なかりけり、折柄猛き若者が、國の爲めとて健氣にも、單身劍を提さげて、城を出でつゝ夜に乘じ、蟻の

ほい出る穴もなき、賊軍の内を潜出で、都の軍に身を投じ城の中なる有様を、語りつ答へつ諜し合ひ、賊兵原を打破り、爰に始めて連絡の、解けて嬉しき厚氷り、地中の魚も時を得て、跳る心の活潑地、進め進めの號令に、萬銃天地に鳴り響き、西北南東なる、「圍の賊を打ち壞ひ」、空前絶後の功を立て、名を揚げ父母を顯はせし、我日の本のますらを、「譽め羨まぬ者そなき」、

●川中島

＊　＊　＊　＊　＊　＊

天文二十三年秋の半の頃かとよ、上杉謙信は八千餘騎を隨へ「川中島に打て出づ」、我今度の戰は、武田信玄を追詰めて、親しく雌雄を決せんと、うづまき返へす犀川を、渡りて陣をぞ取りにける、信玄は此事聞より早やく、二萬騎にて打ち向ひ、疊を堅めて戰かはず、謙信は氣をいらち、村上義清に云ひ含め、木陰暗き山山の、彼方此方に兵を伏せ、木杣と似せし勇士を出して、甲斐の陣營に近づかしむれば、甲斐の兵策事とは露不知、朝霞の間に追まくる、待ち設けたる伏兵は、時こそ來れと鯨鬨をどつと上げつつ打向ひ、袋の物を取るが如く

に、一騎も殘さず打取りたり、信玄怒かつて軍を雲霞の如くに送り出せば、謙信も備を立て、打向ひ、入亂れ入亂れ攻め戰かふ、龍舞て雲を起し、虎嘯きて風を呼ぶ、破竹の如き、勢に、入亂れ入亂れ攻戰かふ、其の有樣暴風卷きて百雷岩を突くに似たり、越後の軍退けは甲斐の軍之を進む甲斐の軍退けば越後の軍之を追ふ、其の兵を合する事十有七度、何れを勝と知らま弓、信玄は一手の勢の旗を伏せ、河を渡りて葦の草の此の間を潛ませて、謙信の旗幟近く進みより、をもてもふらず切て入る、謙信の麾下の兵は思はぬ敵に襲われて、走る

後よりも甲斐の勢鬨をつくつて追かくる、宇佐美定行之を見て虎狼の如く怒り、我手の兵に下知をなし、敵の横間よりむにむさんに突入りて、淵瀬もいわさず追ひ落す、信玄は度を失ひ流を亂して逃げる後より、謙信只一騎、赤栗毛の逞ましきに鞭をあて、何處迄で逃ぐるかと、いひも敢へず切り付く る、信玄は之を援ふ暇なく、軍扇にて受けたれど、扇は二つに割れたり

降ると見て傘取る暇も無かりける

川中島の夕立の雨

早や二の太刀は信玄の肩先に切込ぬ、あつといふ間に信玄の命は岩にくだけて泡と消へなんあやうきを、救はんとすれど水勢早くして近よれず、部将原大隅鎗を上げ只一突きと、突きはしたれどあだつきぬ、斯ては叶ふまじと、只一打ちとなげたれば、馬に當りて馬逸す、謙信は馬を靜めんと、手綱かいとる其暇に、信玄は虎口を逃れて去りにける、

鞭聲肅々夜河渡、
曉見千兵擁大牙、
遺恨十年磨一劍、
流星光底逸長蛇、

如斯信玄を打ちもらしたる謙信の心の中は幾何ならむ、「思ひやるだに哀れなり」、信玄は肩の痛手に絶へかねて、其の夜の中に軍勢を、まとめて歸る月影の、道を求めてはるばると、我故郷に歸りける「我故郷に歸りける」、

* * * * * * * * *

◉月花

月と華とは昔より、誰が樂まぬ人やある、誰「悅ばぬ人やある」左は去りながら月華も、心につれて夏草の、種となれるも多からぬ、足柄山の松風に吹合せたる簫の音も、是より遠く奥州へ、軍となれば身の末は、死ぬか白河の關をば雲やべ

だつらん、勿來の關の春の暮、駒を止めて詠むれば、都の空は花曇り、鎧の袖に散りかゝる、櫻の雪は將軍の鬢の霜より尚白し戟を枕に夜は慣れて、秋の哀れも知らざれど、越山月の最と白く、雲間を渡る雁がねも、都の空へ歸るかと。思へば我も懷かしく、花の都は荒果てゝ、何處が我身の置處、今宵一夜の宿賴む、櫻の露に袖濡れて、滅亡秋に極まりて、「平家の末ぞ悲しけれ」、俊人原の讒により、諫の言の葉容れられず、二人ともなき賢人は、筑紫の浦に詫住ひ、御衣を拜して涙なる、心の底は如何ならむ、十字を記す櫻の木、我が赤心

を示さんになどか他言を要すべき、月の光や花の香や、幾萬年を經る迚も、更に變りなきなるに、常なきものは世の治亂月を見て醉ひ、花を見て眠れる春の手枕の、只一場の夢の間に移る興廢存亡の、世の成行ぞ無常なれ、去れば世間の諸人よ、眞心引起し、國の光を東海の月よりも尚輝し、國の譽を美吉野の、花よりも尚芳ばしく「するこそ今の勤なり」、誓て斯くもなせし後、樂しき月見をしてみたや、樂しき「花見をしてみたや」、

琵琶歌粹錦 終

明治三十九年十月一日印刷
明治三十九年十月十二日發行

正價金拾五錢

編者 琵琶歌研精會

發行者 東京日本橋區大傳馬鹽町十七番地 魚住嘉三郎

印刷者 東京市日本橋區上槇町十六番地 富山利三郎

發行所 東京市日本橋區大傳馬鹽町十七 魚住書店

琵琶歌 不許複製

琵琶歌研精會編

音譜

正調 琵琶歌粹錦

253
279

074723-000-1

特63-622

琵琶歌粋錦

琵琶歌研精会／編

M39

CEJ-0319